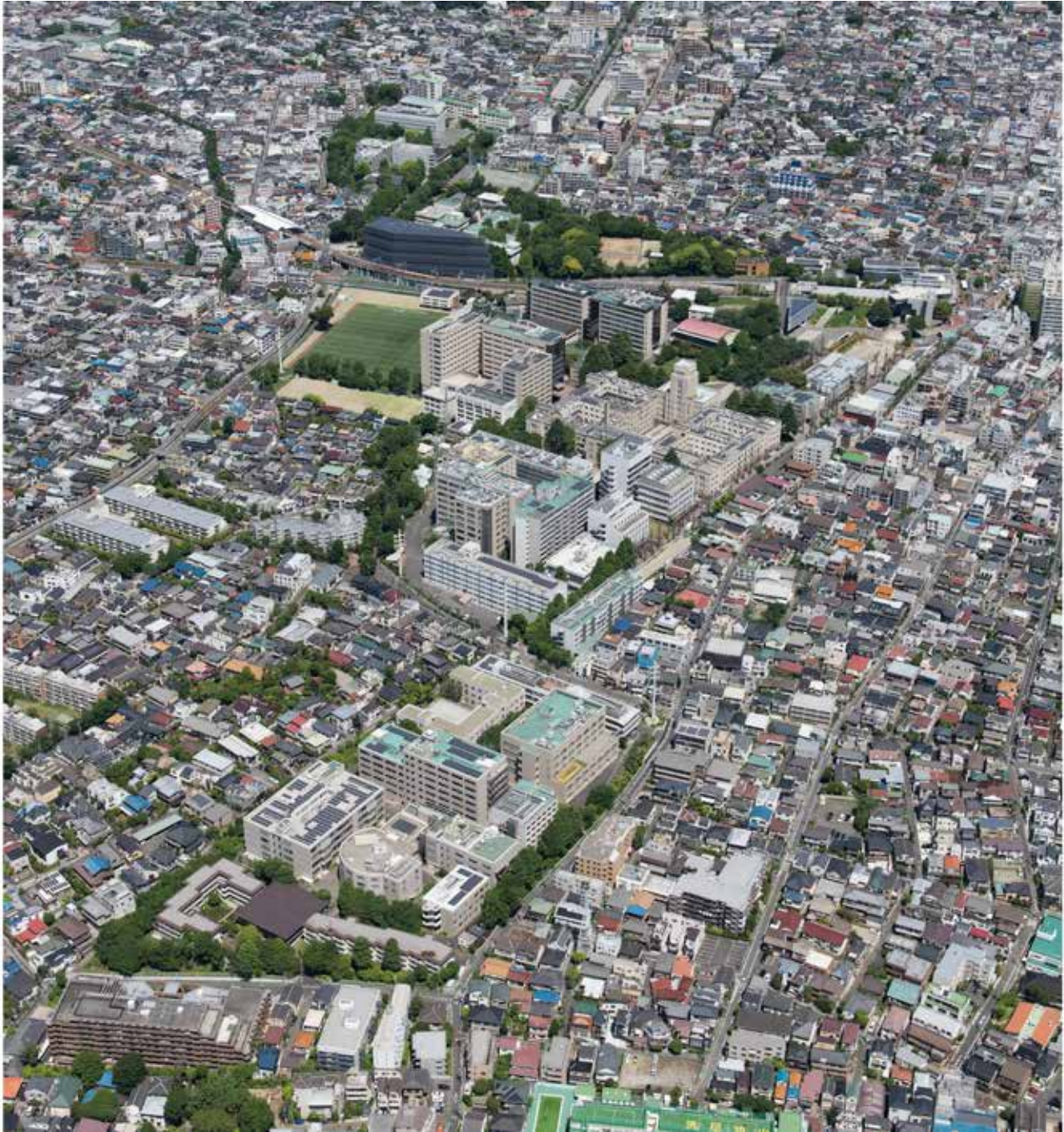


Tokyo Tech Campus Master Plan 2016  
東京工業大学キャンパス・マスタープラン 2016



## 学長メッセージ

東京工業大学は130年以上にわたり、優秀な理工系人材の輩出と卓越した研究成果の創出で日本を牽引してきました。2016年4月には学部と大学院を統合して「学院」を創設し、より充実した教育システムをスタートしています。さらに研究組織も改編して「科学技術創成研究院」を創設し、各教員の高い能力をチームとして生かすことで、本学の強みを世界に発信しています。一方、これらの改革を進める上で重要となるガバナンス改革も推進し、継続的な改革に取り組んでいます。

これらの改革を進め、2030年を目途に「世界トップ10に入るリサーチユニバーシティ」を目指しています。

本学は、主に大岡山（東京都目黒区）、すずかけ台（神奈川県横浜市）、田町（東京都港区）の3キャンパスで教育・研究を展開してきました。2006年に2つのキャンパス（大岡山、すずかけ台）のキャンパスマスタープランを策定し、キャンパスの環境整備を進めてきたところです。その後10年間の大学を取り巻く社会情勢の変化、本学の将来構想「東工大ビジョン2009」の決定、研究大学強化促進事業の採択、スーパーグローバル大学創成支援事業の採択、キャンパス整備の進捗等から、マスタープランを見直すこととし、2015年に各キャンパスの特性を踏まえた「3キャンパスの総合的利用方針」を決定しました。今回の「キャンパスマスタープラン2016」は、この方針に基づき、60年後のキャンパス像を見据えた30年後の将来計画としています。また、インフラ長寿命化計画や施設修繕計画、全学的スペースチャージの導入等、施設マネジメントの方針と整合を図り、実効性が高いマスタープランとしています。

教育・研究の基盤であるキャンパス環境の充実には、本学の強み・特色を発揮するために重要なインフラとしての役割を担っています。キャンパスの60年後の将来像を描くことで、揺るぎない今後のキャンパス環境整備計画を立案することができたと考えています。引き続き、キャンパスマスタープラン2016をよりどころとして、世界最高の理工系総合大学にふさわしいキャンパスづくりに取り組んでいきます。

国立大学法人 東京工業大学

学長 三島 良直



# 目次

## 第1部 キャンパス・マスタープラン 2016 について

### 1. キャンパス・マスタープラン 2016 の位置づけ

1-1. キャンパス・マスタープラン策定の背景と必要性	・・・2
1-2. キャンパス・マスタープラン 2016 と大学の将来構想～ 30 年後を見据えた将来計画～	・・・3
1-3. 大学改革と 3 キャンパスの総合的利用方針	・・・4
1-4. 特性を活かしたキャンパス整備	・・・5
1-5. 地域・社会との連携によるキャンパス整備	・・・6
1-6. 学生を重視しダイバーシティを推進するキャンパス環境の構築	・・・9
1-7. 戦略的なファシリティマネジメントの推進	・・・9
1-8. キャンパス整備の検討・実施体制	・・・9
1-9. CMP2016 とアクションプランの関係	・・・10

## 第2部 キャンパス・マスタープラン 2016 における将来目標

### 2. 主要3キャンパスに通じる6つの理念と整備・活用方針

2-1. CMP2016 における6つの理念	・・・13
2-2. 主要3キャンパスに通じる整備・活用方針（6つのルール）	・・・15

## 第3部 各キャンパスの将来計画

### 3. 大岡山「時—空を縁でつなぐ大岡山キャンパス」将来計画

3-1. 目指すキャンパス将来像	・・・22
3-2. 軸線計画	・・・24
3-3. ゾーニング計画	・・・26
3-4. 動線計画	・・・28
3-5. 建物・空間整備計画	・・・30
3-6. インフラ・エネルギー計画	・・・36

### 4. すずかけ「ペリパトスの研社21」将来計画

4-1. 目指すキャンパス将来像	・・・40
4-2. 軸線計画	・・・42
4-3. ゾーニング計画	・・・45
4-4. 動線計画	・・・46
4-5. 建物・空間整備計画	・・・48
4-6. インフラ・エネルギー計画	・・・52

### 5. 田町キャンパス再開発における基本方針

5-1. 再開発基本方針	・・・54
--------------	-------

### (参考資料)

1. キャンパス・マスタープラン 2016 策定検討組織 構成員	・・・58
2. 検討会議等の開催状況	・・・60
3. 将来計画・将来構想の変遷	・・・63

資料編	・・・65
-----	-------



## 第1部 キャンパス・マスタープラン 2016 について

### 1. キャンパス・マスタープラン 2016 の位置づけ

第1章では、東京工業大学キャンパス・マスタープラン 2016 の位置づけを示すとともに、その策定の背景と必要性、アカデミックプラン及び地域・社会との関連性を明らかにする。

## 1-1. キャンパス・マスタープラン策定の背景と必要性

東京工業大学（以下「本学」という。）においては、1990年代以降の大学院重点化への対応として「研究型大学」として量的整備が進められ、30年前（1985年）に3キャンパス合わせて約24万㎡であった建物保有面積は、2015年時点ではほぼ倍増となる約46万㎡となっている。これら現有施設の経年進行により維持管理費が増大する一方、国立大学法人化以降の法人運営費が漸減してきていることから、計画性のあるキャンパス整備を行い、施設の長寿命化を図りつつ、維持管理コストの縮減を図っていく必要が生じている。

また、これまでは、いわゆる必要面積に対する狭隘解消整備であったこと、また国の政策の変化に応じて施設整備費が予算化されてきたことなどから、中長期的な整備計画があったにせよ、その計画どおりに整備されてきたとは言い難く、その結果、大岡山、すずかけ台ともに「建て詰まり」の様相を呈しており、改修時の一時避難スペースの確保もままならず、大規模改修の計画を行うことができない袋小路に陥っている状況である。

これらの課題を解決していくためには、教育・研究という両輪に対して必要な施設を確保した上で、基盤施設として適正な規模のキャンパスを構築し維持していく必要がある。そのためには、既存ストックの有効活用や施設の高次機能化を推進し、キャンパス空間として適切なバランスを取っていくことが重要である。

これまでの量的整備から「減築」も視野に入れた質的整備へとキャンパス計画の方針を転換し、ゆとりある魅力的なキャンパス空間を実現することで、国内外の優秀な教員・研究者・学生を本学に集め、本学の益々の発展に繋げていく。さらに、東日本大震災の教訓も踏まえ、地域の大規模事業所として、環境への配慮や地域への貢献に対しての本学の方針を示し、社会への説明責任を果たしていく。

2004～2005年度の大岡山キャンパスの本館前プロムナード整備を契機に、2006年度以降キャンパス環境整備のために学内予算が確保され、2006年度に策定された将来計画に概ね基づいて外部空間の環境整備が進められ、学内構成員にその重要性が示されてきた。今後も、将来計画に基づき、継続性をもって整備を進めていくことが重要である。

キャンパスの整備は、長期的な計画とならざるを得ないものであるが、将来計画の根本に流れる理念やルール・コンセプトから逸脱するものであってはならない。将来にわたって一貫性のあるキャンパス空間を構築していくためにも、キャンパス・マスタープランによって、学内外に対して普遍的な方針を示していくことが必要不可欠である。



## 1-2. キャンパス・マスタープラン 2016 と大学の将来構想～ 30 年後を見据えた将来計画～

キャンパス・マスタープラン 2016（以下「CMP2016」という。）は、本学の将来構想「東工大ビジョン 2009」に示されている「キャンパスの総合的な利用の推進」に基づき、本学が目指す世界最高の理工系総合大学「世界トップ 10 に入るリサーチユニバーシティ」の実現に向け、本学キャンパスの目指すべき方向、あるべき姿について、30 年後のビジョンを視野に入れた普遍的な将来計画を示すものである。本学では 2006 年に「東京工業大学キャンパス構想 2 1 将来計画」として 2 つの将来計画（大岡山「時一空を緑でつなぐ大岡山キャンパス」将来計画、すずかけ「ペリパトスの研社 21」将来計画）策定しているが、策定後 10 年を経過し、学内外における状況の変化を踏まえた見直しを図る必要が生じたことから、2 つのキャンパス将来計画を統合し、さらに将来の再開発が見込まれる田町キャンパスの整備方針も含めた大学キャンパス全体の将来計画として再編したものである。

キャンパス計画における長期的なビジョンとなる CMP2016 は、学内構成員がキャンパスの将来像に対する共通認識をもち一丸となって進むためのガイドラインとなるものであり、また学外に公表することで本学が目指す目標や役割について広く周知し、地域・社会との連携により将来構想の実現を図っていくものである。

この CMP2016 を本学キャンパス計画の骨幹として位置づけ、本学の将来構想やキャンパスを取り巻く状況に大きな変革がない限り、将来にわたって継承していくものとし、短期的な見直しは行わないものとする。

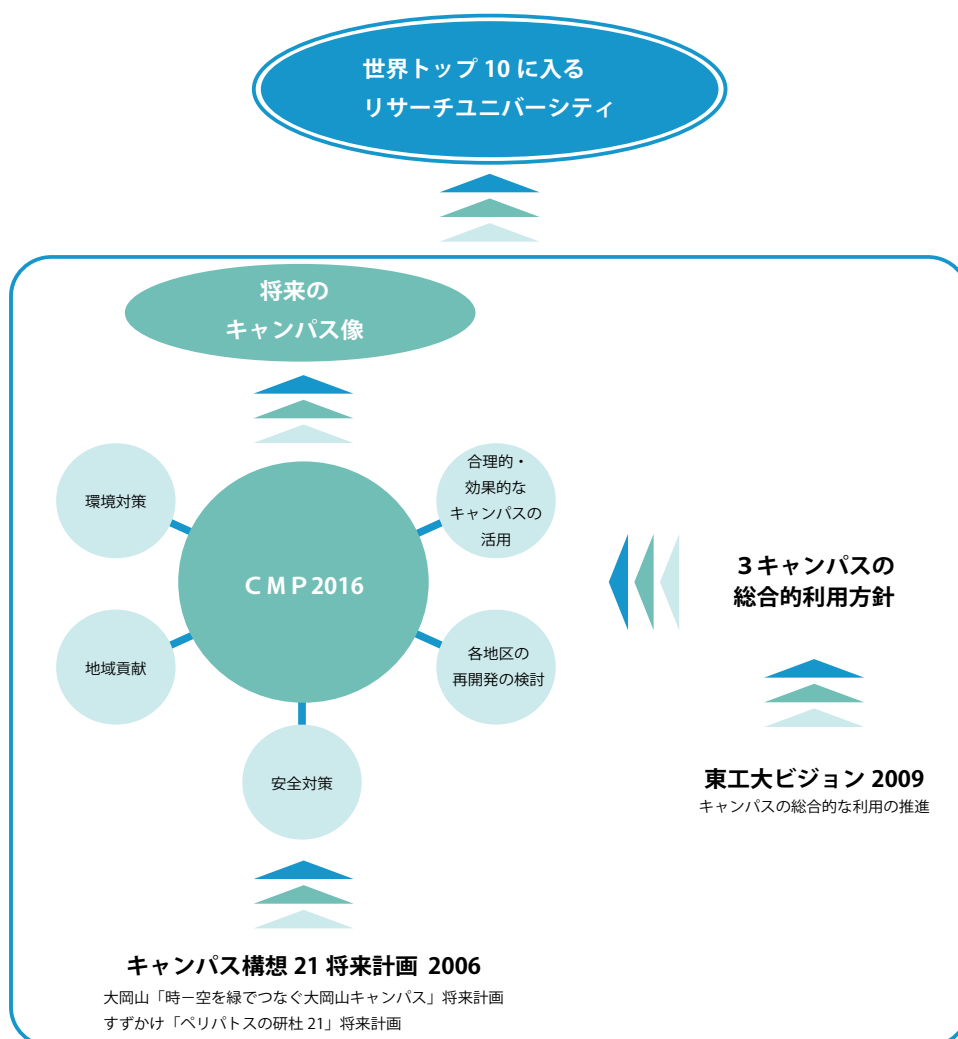


図 1-1 CMP2016 の位置づけ

### 1-3. 大学改革と3キャンパスの総合的利用方針

学長によるトップマネジメントの下、2016年度からの5つの改革（教育改革，研究改革，ガバナンス改革，社会連携改革及び国際化改革）によって，これまでの3学部6研究科4研究所体制から6学院1教育院1研究院に再編されたことから，新組織に対応したスペースの再配置を行っていく必要が生じている。

そのためには，各キャンパスの特性を踏まえ，それぞれの機能に分化・集約を行っていくことで，現状の混然としたキャンパス利用から効率的・効果的なキャンパス利用へ転換を図っていくことが重要であり，その方針として2014年度（平成26年度）に「3キャンパスの総合的利用方針」が学内決定された。

この総合的利用方針は，CMP2016の前提となるものである。

#### 3 キャンパスの総合的利用方針（2015年2月決定）

##### 1. 大岡山キャンパス

学部教育の集約を図り，教育研究内容に応じたスペースの再配置と施設の再ゾーニングにより，学修博一貫教育等を行う教育・研究の場とする。

##### 2. すすかけ台キャンパス

附置研究所の集約と既存スペースの再配置により，大型実験スペースを中心に確保し，大型プロジェクト研究等を行う研究・実験の場とする。

##### 3. 田町キャンパス

敷地の高度利用を図り，教育研究スペースを拡充するとともに，田町駅前という立地を活かし，大学間・産学官・国際連携のためのスペースを確保することにより，社会連携・国際化等の拠点とする。

#### 1-4. 特性を活かしたキャンパス整備

国内の他大学においては、2007年の工場等制限法廃止を契機に、地方や郊外から都心回帰の動きが顕著となっている。大学キャンパスの在り方が多様化している中、特に私立大学においては、今後の18才人口の減少を踏まえ、学生を集めるための戦略としてキャンパス整備に力を入れており、小規模ながら魅力的な都市型キャンパスをもつ大学も少なくない。

本学の主要3キャンパスは、大岡山キャンパス：都市型、すずかけ台キャンパス：郊外型、田町キャンパス：超都市型と、立地により明確に分類されることから、画一的な計画とするのではなく、それぞれの特性を活かし、地域・社会との連携も考慮しながら、魅力的なキャンパスをつくっていく。



大岡山キャンパス（都市型キャンパス）



すずかけ台キャンパス（郊外型キャンパス）



田町キャンパス（超都市型キャンパス）

図 1-2 3キャンパスの周辺立地状況

## 1-5. 地域・社会との連携によるキャンパス整備

本学のキャンパス整備の特筆すべき点として、地域への貢献や地元自治体との連携のもとに進められてきたことが挙げられる。ここにそのいくつかを紹介するとともに、本学が今後取り組むべき方向性を示す。

### (1) 大岡山キャンパス

#### ○大岡山駅周辺の整備

まず、大岡山駅の改良である。運輸政策審議会 18 号答申に位置付けられた東横線複々線化と目蒲線改良事業は 2008 年に武蔵小杉・日吉間の複々線化によって完了したが、混雑の激しい田園都市線方面から都心への代替ルートを強化するために、東急電鉄大岡山駅の地下化によるホーム to ホーム乗換え整備がその中で必須の事業であった。線路切り替えに要する軌道空間や地下駅部が一部大学敷地内に位置したことから、本学が協力することで広域効果を発現する当該鉄道事業の速やかな完成に至った。前後して、環状 7 号線から大岡山駅までの都市計画街路と駅前広場の計画決定および事業化が、本学建設系教員の協力のもと、事業主体である大田区と東急電鉄により進められ、本学が駅前広場用地を一部提供することで地域への貢献を果たし、それまで駅前広場のなかった大岡山駅に、4000㎡の広さを有する現在の駅前広場が完成した。

また、環状 7 号線から大岡山駅に至る街路整備の最終段階として、目黒線蓋かけ部の道路・緑道整備が現在も進められている。この街路の完成後は、環状 7 号線から本学に至るアクセス道路が強化され、大型バスや工事車両等の通行が容易になると同時に、緑道部分を利用した安全な歩行者空間が整備される予定となっている。これらの計画や設計にも本学建設系教員が長年協力している。

キャンパス内においては、大岡山駅周辺の整備と連動して、正門周辺エリアの整備が駅前広場整備と共に進んでおり、2009 年には東工大蔵前会館（TTF）、2010 年には附属図書館が完成している。

#### <今後の方向性>

正門周辺エリアを地域・社会との連携を持った社会連携ゾーンと位置づけ、隣接する大岡山南口商店街との連携や、キャンパス車両入構口整備による前面道路の拡幅整備等により、地域への貢献を果たしていく。

また、キャンパスの将来動線計画と連動して、大岡山駅及び駅前交差点の混雑回避についても、緑が丘駅側へ新たな改札口を設置する等、東急電鉄及び地元自治体と連携・協力のもと、検討を進めていくことが可能な時期に来ている。



大岡山駅前広場

#### ○緑が丘駅周辺の整備

大岡山キャンパスに隣接する緑が丘駅から緑が丘地区西門に至る都道は、幅員が狭い割にバスも運行され、歩道がないため安全で歩きやすい空間ではなく、そのことは本学にとっても長年の懸案であった。そこで緑が丘駅の大井町方面ガード下空間を活用し、本学キャンパスへ直結する入口を設置する構想が、キャンパス将来計画（2006 年策定）に位置づけられた。

この構想は緑が丘駅の大規模改修を前提とするもので、大岡山駅改良に伴い整備される環状 7 号線方面から大岡山駅に至る緑道と、緑が丘駅周辺で結節性の劣る九品仏川緑道や呑川緑道とを本学キャンパス内の道路で結びつけ、より広域の緑道ネットワークを形成しようとするものであった。この整備事業は本学の大きな地域貢献を伴うものであり、バリアフリーや駐輪場整備を同時に行う公益性の高さから、国の都市再生交通拠点整備事業として採択され、2006 年頃より整備が開始された。

鉄道高架下に駐輪場と公共通路が整備されたことで、呑川緑道や駅改札と本学敷地とのアクセス性が向上し、

この整備のために本学敷地内の課外活動施設敷地を工事ヤードとして使用するにあたり、東急電鉄の補償工事として課外活動施設が移転整備されたため、本学としても駅直結の通用口につながる広場空間を早期整備することが可能になった。今では都市再生拠点事業の完成によって、新たな緑が丘駅直結の通用門が外部に開かれ、大岡山から緑が丘に至る構内道路が外部の緑道のネットワークと結節され、地域への貢献を果たしている。

また、緑が丘駅に交差する道路の鉄道ガード架け替えにあたり、歩道のない現状に配慮し、大型車両等の増加を誘発しないよう現状の高さのまま実施するなど、地元自治体である目黒区と東急電鉄との計画づくりや事業にも、本学建設系の教員が当初より協力している。

### <今後の方向性>

駅の1階コンコースは大岡山方面にも改札口を容易に設置可能な構造となっており、本学としても将来的に更なる活用が期待される。



緑が丘通用門・広場

## ○大岡山北地区の都市計画公園

大岡山駅と緑が丘駅の改修整備とそれに伴うキャンパス出入口空間の整備によって、両駅を結ぶ構内動線が地域でも利用可能になった。両駅をつなぐ本学構内道路に接する「ひょうたん池」周辺は、都市計画法による都市計画公園（近隣公園）に指定されている。そのため、将来的に地域に開放された緑地空間とすることが地元自治体からも望まれてきた。



ひょうたん池周辺（都市計画公園内）

### <今後の方向性>

ひょうたん池と隣接する大岡山北地区エリアの再開発計画も視野に入れ、大岡山と緑が丘駅を繋ぐ動線や呑川緑道とともに都市計画公園の将来整備のありかたを地元自治体である目黒区と連携・協力のもとで検討することが可能な時期にあると考えられる。

## (2) すずかけ台キャンパス

### ○すずかけ台キャンパスの土地利用

すずかけ台キャンパスでは、国道246号線から本学岡部門に至る道路（本学敷地）をキャンパス東の公道と接続させ、キャンパスの開設時より公道として一般の通過交通利用に供してきた。近年は東西方向の抜け道としての利用が増しているにも関わらず歩道が整備されていないため、交通安全面での課題も少なくない。また、すずかけ台駅から本学すずかけ門までのアプローチ動線についても、歩行者の安全性やキャンパスの認知度という観点から、地域との連携を図って改善していくべき余地が残っている。



国道246号線～岡部門までの公道

キャンパス内においては、地元自治体である横浜市との協定によって、約 33% の用地を緑地として保全することとしており、土地利用上、高層の施設整備によって緑の環境を保ってきた。

### <今後の方向性>

今後、国道 16 号線と国道 246 号線との立体交差事業の完了や国道 246 号線の概成整備の進捗に応じて、例えば国道 246 号線に隣接する本学グラウンド周辺に道の駅機能を付加するなど、地元自治体と協力した地域に資する取り組みが考えられる。さらに、国道脇の本学用地の緑地環境を整備するなど、沿道地域への景観配慮を進めていく。また、大学最寄り駅であるすずかけ台駅から本学にアプローチするトンネルを整備することで、広く国内外から訪れる最先端の研究者や留学生の認知度を高め、本学が活性化することで、地域全体の価値が高まることも期待できる。

2016 年度に完成したキャンパス外周道路によって、キャンパス内の防災力が向上したことから、地域の避難場所や防災拠点としての機能を一層発揮できるように、国道事務所や横浜市等との連携を強化し、災害時には防災面で地域・社会に貢献するよう、土地利用のありかたを再検討していく。その際、できるだけ建物の高度利用を図りキャンパス内の緑地や空地の確保に努めることで、景観や緑の環境に一層配慮していく。

また、本学の将来構想に位置付けられた研究センターのキャンパスとして、横浜市基本構想を踏まえ、本学が地域社会と共に発展できるようなキャンパスをつくっていく。そのためには、世界中から最先端の研究者や留学生が多数長期滞在できるゲストハウスや学生寮の整備が不可欠であり、今後は、横浜市との連携・協力のもとで、市街化調整区域の見直しについて検討を行っていく。

## (3) 田町キャンパス

### ○田町駅東口地区再開発整備

田町キャンパスを含む JR 田町駅東口地区は、「田町駅東口再開発地区計画」として都市計画決定されており、隣地のグランパークエリアの再開発と田町駅前広場の整備が先行して進められ、1996 年にグランパークエリアの再開発が、2003～2004 年にかけて田町駅の東西自由通路の拡幅及び駅前広場（バスロータリー）が、それぞれ完成している。また、駅前広場を挟む東口北地区においても、地区計画の都市計画決定を受けて現在再開発事業が進められている。

駅前広場整備においては、本学と東京都及び港区との協議によって、本学敷地を土地交換する形で協力しており、校舎・体育館（3号館・5号館）及び部室・倉庫は、この交換による補償事業として 1999 年に整備された。



田町駅前広場（右側が田町キャンパス）

### <今後の方向性>

今後は、周辺再開発の完了に伴い田町駅利用者が大幅に増となることも踏まえ、地区計画に示された周辺地域の動線計画に配慮するとともに、国家戦略特区や都市再生特区にも位置づけられていることから、敷地の高度利用を図っていくことを前提として、国、東京都及び港区との連携・協力のもとで、再開発に向けた方針を定め、指定国立大学制度も視野に入れつつ、より具体的な検討を進めていくべき時期にきていると考えられる。

## 1-6. 学生を重視しダイバーシティを推進するキャンパス環境の構築

本学ではこれまで、研究施設の整備が重要視されてきたため、大学キャンパスに必要な広場空間の確保や学生の自主的な学修スペースとなるコモンスペースの整備が進んでいない状況であることも課題となっている。今後のキャンパス整備においては、大学における主たるステークホルダーである学生（留学生を含む。）を重視し、キャンパス生活の向上に資する整備を優先的に行っていく。前述のとおり、3キャンパスそれぞれの立地特性に大きな違いがあるが、すずかけ台キャンパスにおいては、その他の都市型キャンパスに比べ、交通アクセスが不便であることやキャンパス周辺に商業施設等がないなど、キャンパス生活における格差が生じている。これらを改善していくため、特にすずかけ台キャンパスにおいては、キャンパス環境整備やスペースマネジメントにより、研究・教育環境が向上していくよう努めていく。

また、本学が目指す「世界トップ10のリサーチユニバーシティ」を実現していくためには、多種多様な人材を受け入れて行くことが重要であり、そのためには、性別、人種、宗教などの違いによって差別されない環境の構築が必要不可欠である。2017年度には大岡山キャンパス内に保育所がオープンするが、各キャンパスにおいて、こういった保育施設の拡充、外国人教員の宿泊施設や留学生寮の確保、食堂の対応などを推進していく。

## 1-7. 戦略的なファシリティマネジメントの推進

本学の将来構想実現に向け、CMP2016に示すキャンパス将来像を現実のものとしていくためには、クオリティ、スペース、コストの総合的なバランスを図りつつ、実行性のあるファシリティマネジメントを行っていくことが重要である。そのため、本学においてはファシリティマネジメントを、教育、研究、広報・社会連携と並ぶ大学運営における重要な柱の一つとして位置づけ、トップダウンによる一元的な体制を構築することで戦略的に実行していく。

具体的なスペースマネジメントの取組として、本学独自のスペース配分基準の設定により部局間におけるアンバランスを是正し、限られた資源であるスペースの有効活用を図るとともに、大型研究実験機器等の全学共通化やスペースの大部屋化等によって、設備・スペースの共同利用化を推進していく。また、全学スペースチャージ制の導入や施設修繕計画の策定など、多様なコストマネジメントの取組を推進し、教育研究基盤の維持管理に必要な財源を確保し、予防保全による維持管理費用の削減と効率化を図ることで、教育研究環境の持続的な向上を目指す。そのためには、インフラ長寿命化計画の策定により、既存ストックの長寿命化と有効活用を図ると共に、BIM（Building Information Modeling）の導入も視野に入れ、ライフサイクルコストをきちんと把握していくことが重要である。

## 1-8. キャンパス整備の検討・実施体制

本学では、2013年4月に本学の将来構想に基づくキャンパスの総合的な整備計画について検討・立案を行う組織として学長の下に設置された「キャンパス整備計画室」を発展的に組織改変し、2016年度から企画戦略本部（キャンパス・計画設備共用化部会）において、キャンパス将来計画及び施設マネジメントについて、検討・立案を行ってきたところである。

本学のこれまでのキャンパス整備は、学長のトップダウンにより比較的学内部局の利害にとらわれず進められてきたといえるが、今後益々キャンパス整備や施設マネジメントが重要になってくることは明らかであり、これらを一元的にとらえ、検討・実施していく体制の強化が必要であることから、2017年度より、学長室の下に、キャンパス計画、スペースマネジメント、省エネルギー推進及び総合安全管理を統括的に所掌する「キャンパス・マネジメント本部」を設置し、大学の戦略に基づき、企画立案から執行までを機動的に行う体制を構築することとしている。

### 1-9. CMP2016 とアクションプランの関係

CMP2016 の実現に向けた具体的な実行プランとなるアクションプランは、①部門別計画（インフラ長寿命化計画、緑化計画、照明計画、セキュリティ計画等）、②キャンパス整備年次計画（キャンパス中長期整備計画、施設修繕計画等）、③個別事業計画（再開発事業や主要建物の基本計画、スペースの移転・集約計画等）など多岐に渡るため、必要に応じて別途策定するものとする。

これらのアクションプランは、本学を取り巻く状況を睨みつつ緊急度や重要度の高いものから策定していき、状況の変化に合わせ随時見直しをしていくこととなる。策定に際しては、経営的な視点も踏まえた検討を行っていくことが重要であり、そのためには施設マネジメントと連動した予算確保のための取組やPDCAによる実施体制づくりも必要不可欠である。特に②キャンパス整備年次計画及び③個別事業計画については、中期目標・中期計画に基づき、原則として6年ごとにフォローアップを行い、必要な見直しを行う。

また、事業計画の実現性を担保するためには、資金面での検討も必要不可欠である。昨今、国立大学法人全体で国の補助金に頼らない多様な財源による施設整備が進んできており、文部科学省においても国立大学法人法の規制緩和の動きを進めているところである。今後、個別事業計画等の策定にあたっては、これらの状況を見据えつつ、PPP/PFIによる民間活用や基金創成なども含めた多様な整備手法を検討していくものとする。

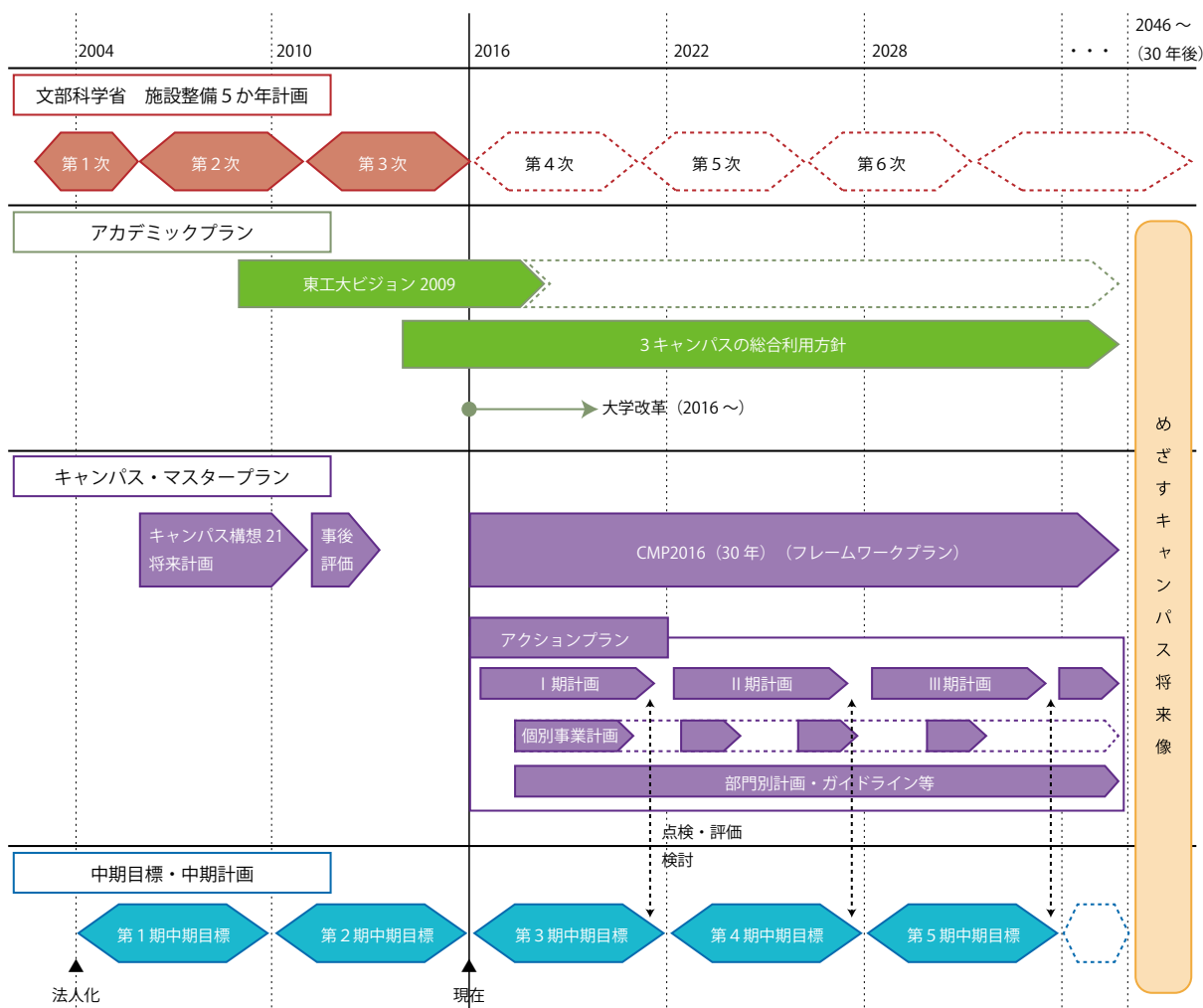


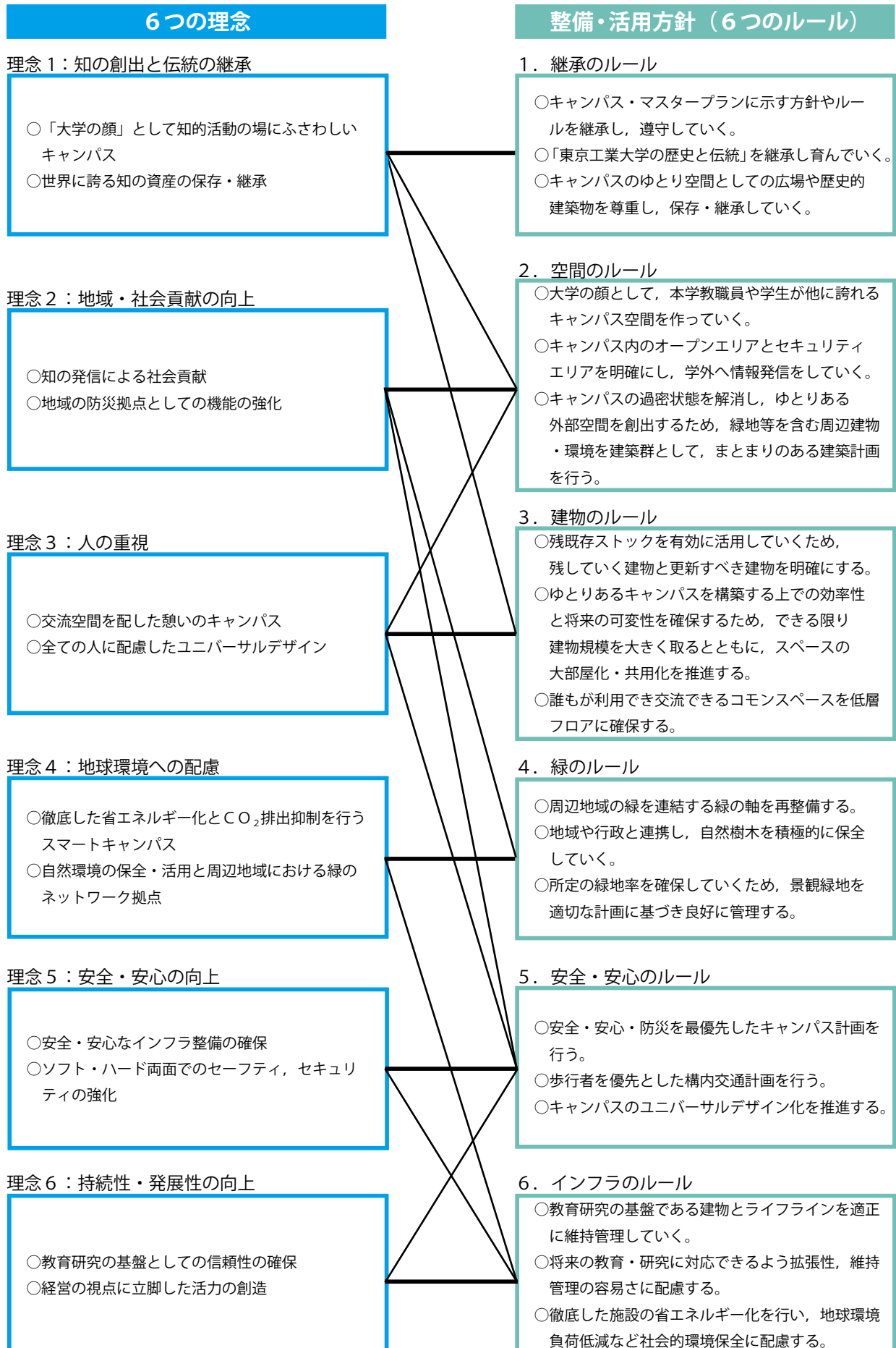
図 1-1 アカデミックプランとキャンパス・マスタープランの関係性



## 第2部 キャンパス・マスタープラン2016における将来目標

### 2. 主要3キャンパスに通じる6つの理念と整備・活用方針

第2章では、CMP2016の基本となる6つの理念を示すとともに、主要3キャンパスに通じる整備方針・活用方針として、厳守すべき6つのルールをとりまとめる。



## 2-1. CMP2016 における6つの理念

本学のアカデミックプランやこれまでのキャンパス将来計画を踏まえ、CMP2016における6つの理念を定める。この6つの理念は、本学が目指す世界最高の理工系総合大学「世界トップ10の研究ユニバーシティ」を具現化するために、キャンパスがどうあるべきかを示すものであり、キャンパス計画の骨幹となる考え方となる。

### 理念1：知の創出と伝統の継承

教育研究の拠点として、本学の強みであり特色でもあるサイエンスとエンジニアリングを重視し、世界最高の理工系総合大学に相応しい、「高い文化的香りを持つ」キャンパスを実現する。

- 「大学の顔」として知的活動の場にふさわしいキャンパス
- 世界に誇る知の資産の保存・継承

### 理念2：地域・社会貢献の向上

地域・社会の発展にも寄与し、互いの活性を向上させる、「地域共生」キャンパスを実現する。

- 知の発信による社会貢献
- 地域の防災拠点としての機能の強化

### 理念3：人の重視

様々な人々の交流の和が生まれ、国際社会へも対応した、「ユニバーサルデザイン・キャンパス」を実現する。

- 交流空間を配した憩いのキャンパス
- 全ての人に配慮したユニバーサルデザイン

### 理念4：地球環境への配慮

豊かな自然資源を生かし、低炭素化など社会的環境保全に配慮した、「境負荷低減」キャンパスを実現する。

- 徹底した省エネルギー化とCO<sub>2</sub>排出抑制を行うスマートキャンパス
- 自然環境の保全・活用と周辺地域における緑のネットワーク拠点

**理念5：安全・安心の向上**

大規模災害等の非常時における事業継続性を確保するとともに、通常時においても誰もが安心な「ユニバーサルセーフティ」キャンパスを実現する。

- 安全・安心なインフラ整備の確保
- ソフト・ハード両面でのセーフティ，セキュリティの強化

**理念6：持続性・発展性の向上**

維持管理面での経済性，効率性を持ち，将来の変化に対応できる拡張性も兼ね備えた「サステイナブル」キャンパスを実現する。

- 教育研究の基盤としての信頼性の確保
- 経営の視点に立脚した活力の創造



図 2-1 キャンパス・マスタープラン 2016 の構成

## 2-2. 主要3キャンパスに通じる整備・活用方針（6つのルール）

CMP2016 に掲げる6つの理念を具体化し、それらを達成するための整備・活用方針として、継続的に守るべき6つのルールを定める。これらのルールは、広く学内外に公開し周知を図るとともに、改訂が必要とされない限り、恒久的に厳守することが全ての関係者に要求されると考える。

### 1. 継承のルール

<関連：理念1>

- キャンパス・マスタープランに示す方針やルールを継承し、遵守していく。
- 「東京工業大学の歴史と伝統」を継承し育てていく。
- キャンパスのゆとり空間としての広場や歴史的建築物を尊重し、保存・継承していく。

- 将来構想による目標を達成していくためには、CMP2016 に示す6つの理念に基づき、決められた方針やルールを将来にわたって遵守していくことが重要である。6つのルールを遵守することが、まず最初に守るべき根源的なルールとなる。
- 本学教職員や学生により培われてきた「知的財産」もキャンパスを構成する大きな要素である。キャンパスをつくるのは「人」であり、世界に通用する人材を育成し続けることが「東京工業大学の歴史と伝統」を継承し育てていくことにほかならない。伝統と革新が調和した魅力あるキャンパス空間を実現し、世界最高の理工系総合大学への発展につなげていく。
- 本学は開校以来130年以上の歴史を有し、長年にわたりその伝統と歴史を継承し続けてきた。大岡山キャンパスの本館前プロムナードやすすかけ台キャンパスの広場空間は、「余白」としてのゆとり空間であり、アカデミックなキャンパスに必要な不可欠な要素である。また登録有形文化財に指定されている大岡山西1号館、本館及び70周年記念講堂をはじめとした歴史的に貴重な建築物も多く存在する。これらは地域、社会にとっても貴重な財産であり、将来にわたって継承していくべきものである。そして新たにつくっていくキャンパス内の建物や環境についても、これらの伝統ある景観と調和の取れたものでなくてはならない。



本館前プロムナード（大岡山）



芝生広場（大岡山）



中央広場（すすかけ台）



大岡山西1号館（大岡山）



本館（大岡山）



70周年記念講堂（大岡山）

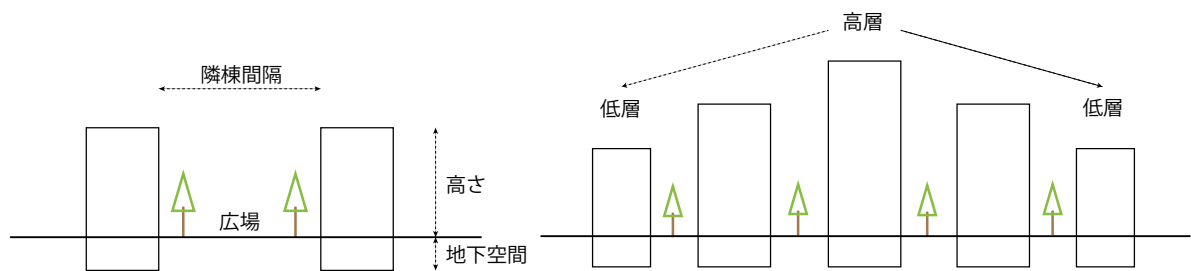
図 2-2 継承していくべき広場空間と建物

2. 空間のルール

<関連：理念1, 理念2, 理念3>

- 大学の顔として、本学教職員や学生が他に誇れるキャンパス空間を作っていく。
- キャンパス内のオープンエリアとセキュリティエリアを明確にし、学外へ情報発信をしていく。
- キャンパスの過密状態を解消し、ゆとりある外部空間を創出するため、緑地等を含む周辺建物・環境を建築群として、まとまりのある建築計画を行う。

○大岡山・すずかけ台キャンパスともに、「計画なきところに建物なし」という建物配置ルールを徹底し、必要な広場空間をバランスよく配置するとともに、既存建物と調和の取れた建物景観・高さとして、キャンパス景観を保持していく。



- ・建物高さは、法的制約にあわせて周辺との調和を図る
- ・地下空間を有効活用する  
(精密機器や重量機器は地下又は1階に集約)
- ・隣棟間隔を広く取り、外部空間を創出する
- ・壁面線等をそろえ、連続性を持たせる
- ・キャンパス中央部を高層エリアとし、周辺部は低層エリアとする
- ・高層建物は既存の高層建物高さにあわせる

図 2-3 建物配置と高さの考え方

○キャンパスは豊かな緑に囲まれた広大な敷地を有しており、大学と周辺地域との連携を図っていくことで地域貢献を果たしていくことが重要である。一方で教育研究環境としての静謐さや安全面での対応も必要であり「キャンパスの公園化」は望ましい状況ではない。そのため、キャンパス内のオープンエリアと教育研究環境としてセキュリティを重視すべきエリアの明確化を図った上で、建物単位でのセキュリティレベルを設定する。オープンエリアでは、本学の取り組みや研究成果等について、積極的に情報発信を行っていく。

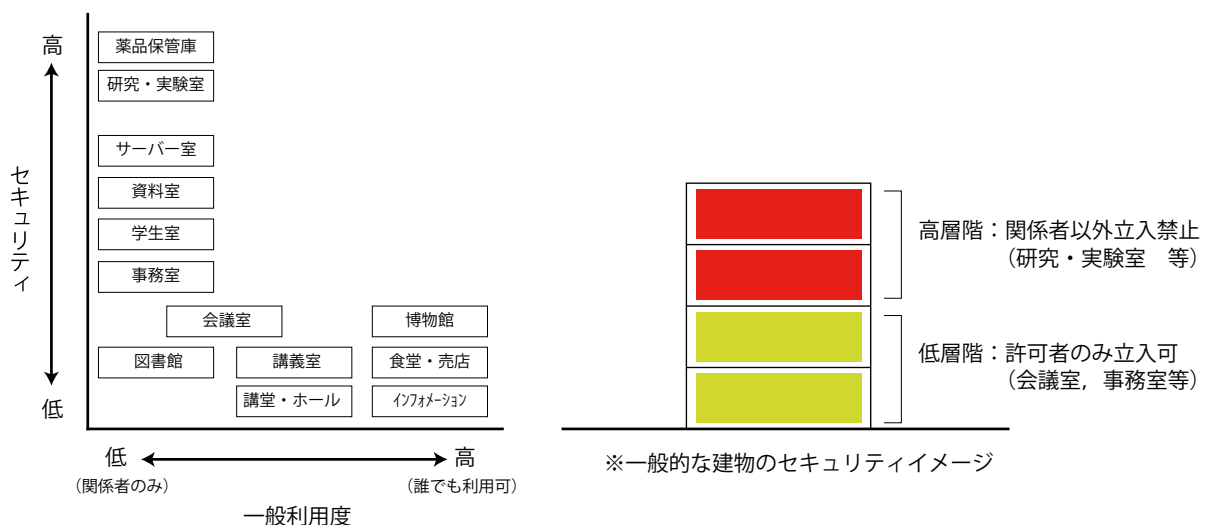


図 2-4 セキュリティの考え方と建物セキュリティイメージ

- キャンパス整備においては、単独の建物だけの局所的な計画とはせず、周辺の建物や環境も含めた「群」として計画していくこととし、建物の計画とあわせて新たな外部空間（広場・緑地等）を整備していく。老朽化した小規模建物の集約等によりキャンパスの過密状態を解消し、魅力あるキャンパス空間・ゆとりある外部空間の醸成につなげていく。

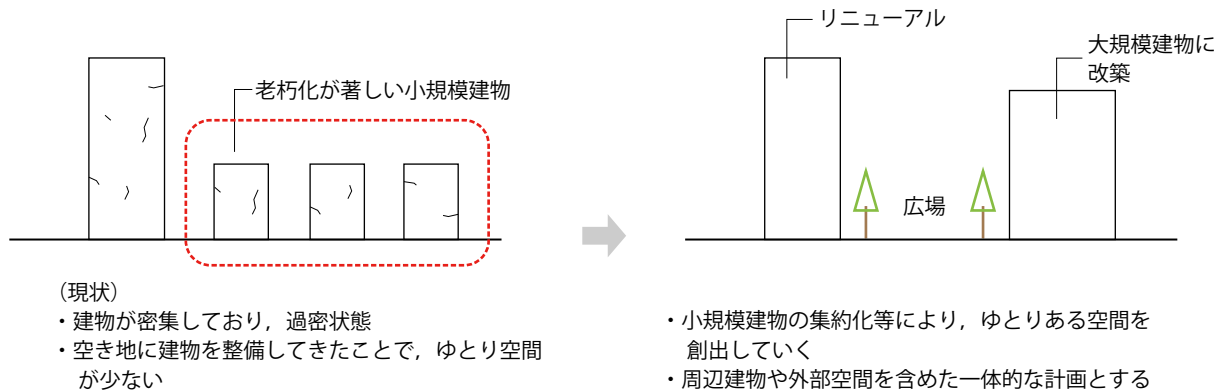


図 2-5 建物群の一体的な計画イメージ

### 3. 建物のルール

<関連：理念1，理念3>

- 既存ストックを有効に活用していくため、残していく建物と更新すべき建物を明確にする。
- ゆとりあるキャンパスを構築する上での効率性と将来の変換性を確保するため、できる限り建物規模を大きく取るとともに、スペースの大部屋化・共用化を推進する。
- 誰もが利用でき交流できるコモンスペースを、低層フロアに確保する。

- 大学施設は、公共的財産として有効活用していくことが求められる。限られた予算の中で既存ストックを有効活用していくために、末永く活用していく建物と更新していくべき建物を見極め、メリハリのある建物整備及び改修計画を立案していく。
- これまでの建物整備では、平面計画は主に中廊下型の画一的な小部屋を並べるかたちで整備されてきており、多様化する教育・研究に対して使いやすさとは必ずしも言い難い。特殊な用途となる建物は別として、一般的な校舎については、何にでも転用が可能な、できるだけ大規模な建物として整備していくことが、ゆとりあるキャンパスを構築する上でも効率的である。昨今、文部科学省においても「オープンラボ」、「スペースの共用化」といったキーワードが示されているように、将来的な拡張性やコンバージョンなども視野に入れ、建物完成時の入居者だけの都合ではない将来の展望や戦略を踏まえた建物整備計画としていく。また、研究実験の内容や用途に応じた適切なスペース配置を行うことで、イニシャル・ランニングコストの低減を図っていく。

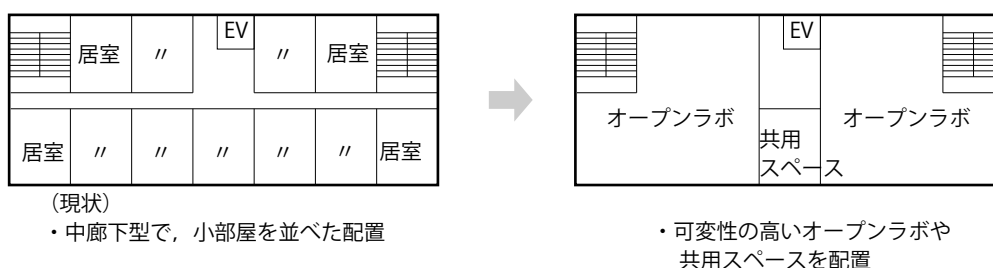


図 2-6 スペースの大部屋化・共用化の考え方

- キャンパスのセキュリティとも関係するが、研究実験を行う部分とオープンに利用する部分は明確にする必要がある。また学生の居場所となるコモンスペースが十分に確保されていないことから、基本的に建物エントランスフロアには、誰もが利用できるコモンスペースやアメニティスペースを確保していく。

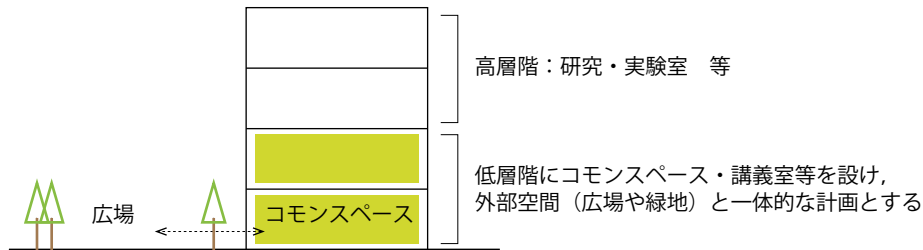


図 2-7 コモンスペース配置の考え方

#### 4. 緑のルール

<関連：理念2，理念4>

- 周辺地域の緑を連結する緑の軸を再整備する。
- 地域や行政と連携し，自然樹木を積極的に保全していく。
- 所定の緑地率を確保していくため，景観緑地を適切な計画に基づき良好に管理する。

- 大岡山キャンパスの周辺には，広域的な緑軸である呑川本流緑道や九品仏川緑道が交差しており，環七導入路緑道も計画されている。本学内の大岡山駅から緑が丘駅にかけての緑軸，東工大蔵前会館から将来計画であるブリッジを介して本館プロムナードへつなげる緑軸，大岡山南地区から石川台へ向かう緑軸の3つの主要な緑の軸を再整備し，周辺の緑軸とのネットワークを形成する。
- 大岡山北地区には高低差のある豊かな緑地や斜面が広がっており，一部は都市計画公園にも指定されている。また，すずかけ台キャンパスにおいても，加藤山をはじめとする構内の自然山林が，横浜市との協定緑地として保存されてきた。大岡山，すずかけ台キャンパスそれぞれが，所在する目黒区，大田区及び横浜市における重要な緑の拠点として位置づけられていることから，これら自然樹木を積極的に保全・活用し，地球環境へ配慮するとともに，地域への貢献を果たしていく。
- 景観緑地についても，適切な緑地保全を継続的に実施し，キャンパス内に必要な緑地率を確保する。

#### 5. 安全・安心のルール

<関連：理念2，理念3，理念5，理念6>

- 安全・安心・防災を最優先したキャンパス計画を行う。
- 歩行者を優先とした構内交通計画を行う。
- キャンパスのユニバーサルデザイン化を推進する。

- 本学では建物及び講堂等の特定天井の耐震化は完了しており，今後はその他の大規模天井や外壁・建具等の落下防止措置など非構造部材の耐震化を進め，災害時等における安全・安心な避難経路を確保していく。また，老朽化したライフラインの更新・維持管理，災害時等の緊急時避難場所として必要な機能の充足，建物セキュリティや外灯などの防犯面での対策，歩車分離の徹底による安全な交通環境の実現，危険物を取り扱う研究実験の安全性向上などを強力に推進していく。研究実験スペースの配置や利用上の制約などについても一定の方向性を示し，建物を利用する全ての人に対しての安全性を向上させていく。



- 構内交通計画に際しては、歩行者を最優先とし、敷地の外周部に主要車両動線を確保し、その周囲に駐車場を適切に配置する計画とする。サービス車両の駐車スペースについては、各建物近傍に適切に配置していく。自転車駐輪場についても、必要な場所に適切な駐輪台数を確保していく。

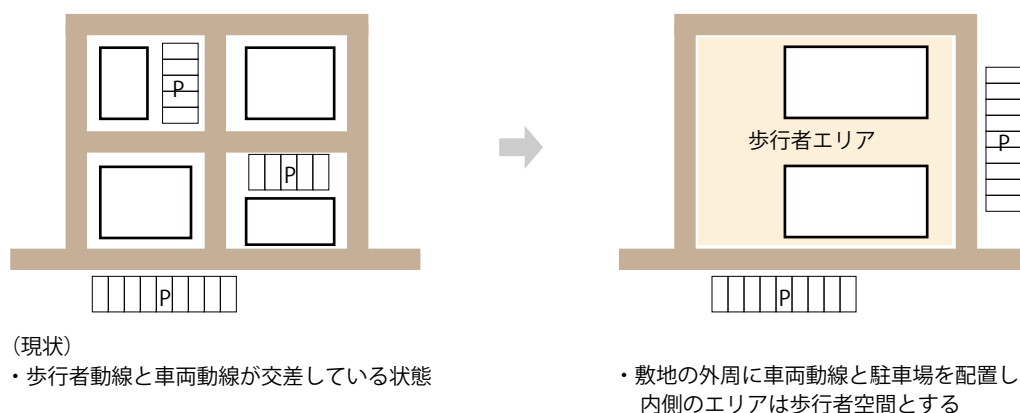


図 2-8 歩行者優先の交通計画の考え方

- 本学においては 2016 年からの大学改革やスーパーグローバル大学創成支援事業により、これまで以上に国際化を推進してきている。キャンパス内においても案内サイン等の英文化を進めてきているが、今後は老若男女、日本人・外国人、障がいの有無にかかわらず、キャンパスを利用する全ての人に対するユニバーサルデザインを進めていく。

## 6. インフラのルール

<関連：理念4，理念5，理念6>

- 教育研究の基盤である建物とライフラインを適正に維持管理していく。
- 将来の教育・研究に対応できるように拡張性、維持管理の容易さに配慮する。
- 徹底した施設の省エネルギー化を行い、地球環境負荷低減など社会的環境保全に配慮する。

- 建物及びライフラインの老朽化に伴う修繕・更新は、今後の経年進行によって、ますます重要性が増してくることは明白である。効果的・効率的な修繕・更新を勧めていくため、キャンパス計画においては、基幹インフラの再整備を優先して行い、次に構内の各要素をバランスよく再配分していくという手順をとるものとする。
- 大学施設は、将来の教育・研究の変化への対応ができなくてはならない。特に最先端の研究実験を行っている本学においては、給排水、電力、ガス、インターネットなどの情報通信、さらには実験廃水やヘリウム回収設備など研究大学に特有な設備も存在しており、これら設備の拡張性や維持管理の容易さを確保することが必要不可欠である。また、実験設備や空調室外機等を設置するための設備バルコニーの設置や、大型機器搬入のためのクレーン設置場所を確保しておくことも重要である。空調設備については、各建物の特性に合わせ、中央熱源方式や個別空調方式など適切な方式を採用することが前提ではあるが、一斉に更新時期を迎えている現状と、日進月歩の技術革新が行われていることを踏まえ、一般校舎においては、部分的な更新が可能となる個別空調方式を原則とし、更新時における影響範囲の縮小とコスト負担の軽減を図るものとする。
- 現在大岡山においては各所に太陽光発電設備が整備され環境エネルギーイノベーション棟と連携したスマートグリッドが稼働しているが、このような先進的な取組により温室効果ガス排出抑制や省エネルギー化を推進していくことは大規模事業所となる大学の使命であるといえる。また、環境負荷低減という観点から電力に頼らないパッシブな設備・環境デザインを行っていくことも重要である。



## 第3部 各キャンパスの将来計画

### 3.大岡山「時—空を緑でつなぐ大岡山キャンパス」将来計画

### 3-1. 目指すキャンパス将来像

大岡山キャンパスの現状配置図と将来目指す計画配置図を示す。この将来計画配置図は、概ね60年後の目標である。以降、本章においては、この将来像実現に向けた30年後のフレームワークプランを示す。



図 3-1 大岡山キャンパス現状配置図

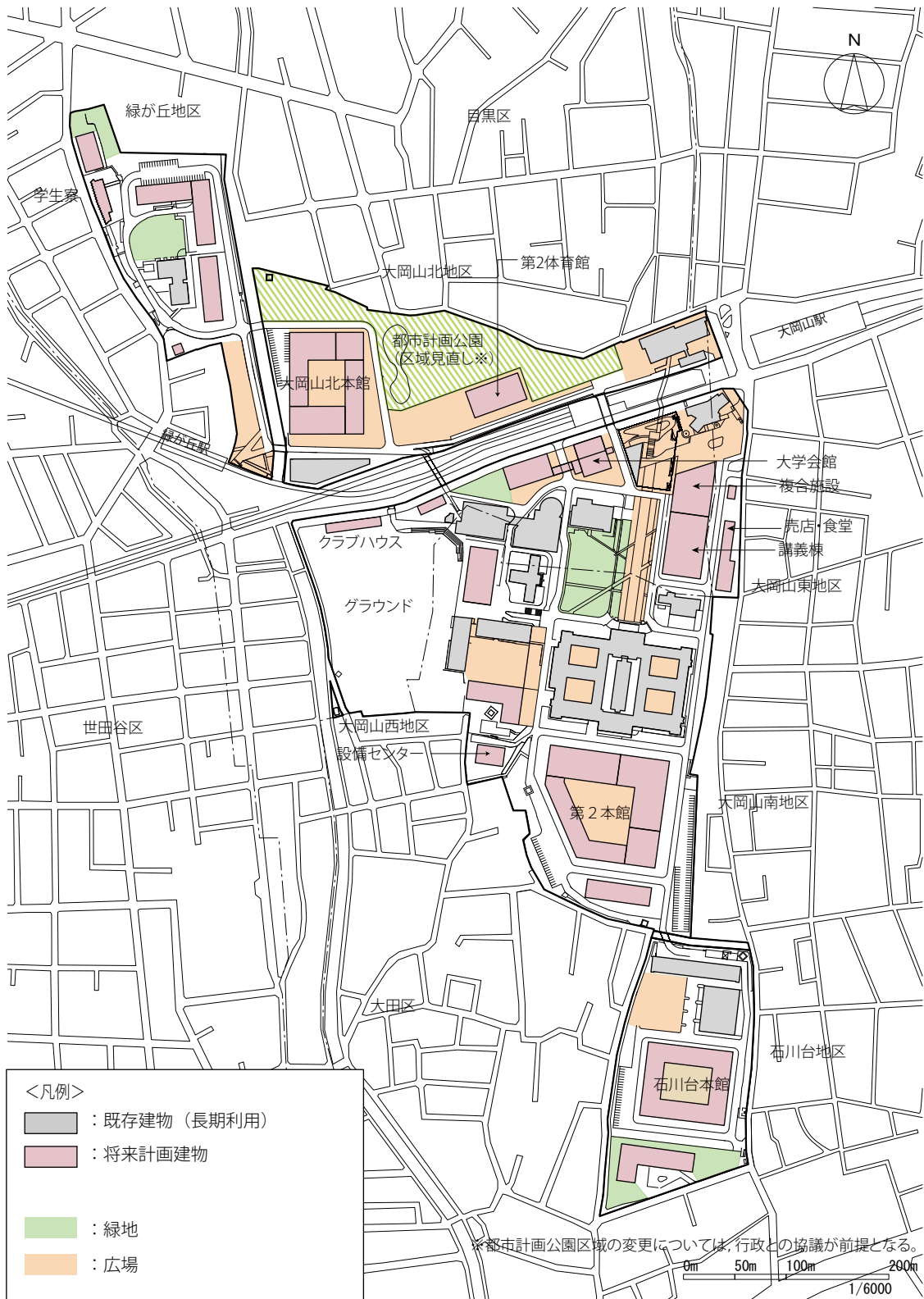


図 3-2 将来計画配置図（60 年後）

## 3-2. 軸線計画

## コンセプト：緑地軸と広場空間のネットワーク化

&lt;継承のルール, 緑のルール&gt;

これまでの将来計画において、「学外の緑地軸と学内の主要軸線及び広場とのネットワーク化」をコンセプトとして整備を進めてきたが、外部アメニティ空間の貧弱さや緑地・広場の未活用など、多くの課題が残されている。

今後も従前のコンセプトを継承し、まず東工大蔵前会館から将来ブリッジを通り本館正面へとつながる軸線を、メイン軸線（キャンパスモール）として整備することを優先事業として位置づけるものとする。そして、キャンパス内外にある以下の4つの代表的な緑地軸を今後も保存・継承及び再整備し、この緑地軸に沿って各所に緑地や広場などを整備し、ネットワークを形成していく。

(4つの緑地軸)

- ① 正門から石川台地区へと続く銀杏並木
- ② 九品仏川緑道から大岡山駅前を抜け環七導入路へつながる、大岡山北地区の銀杏並木とロマンス坂の桜並木
- ③ 緑が丘地区を抜ける呑川緑道沿いの銀杏・桜並木
- ④ 本館前プロムナードの桜並木

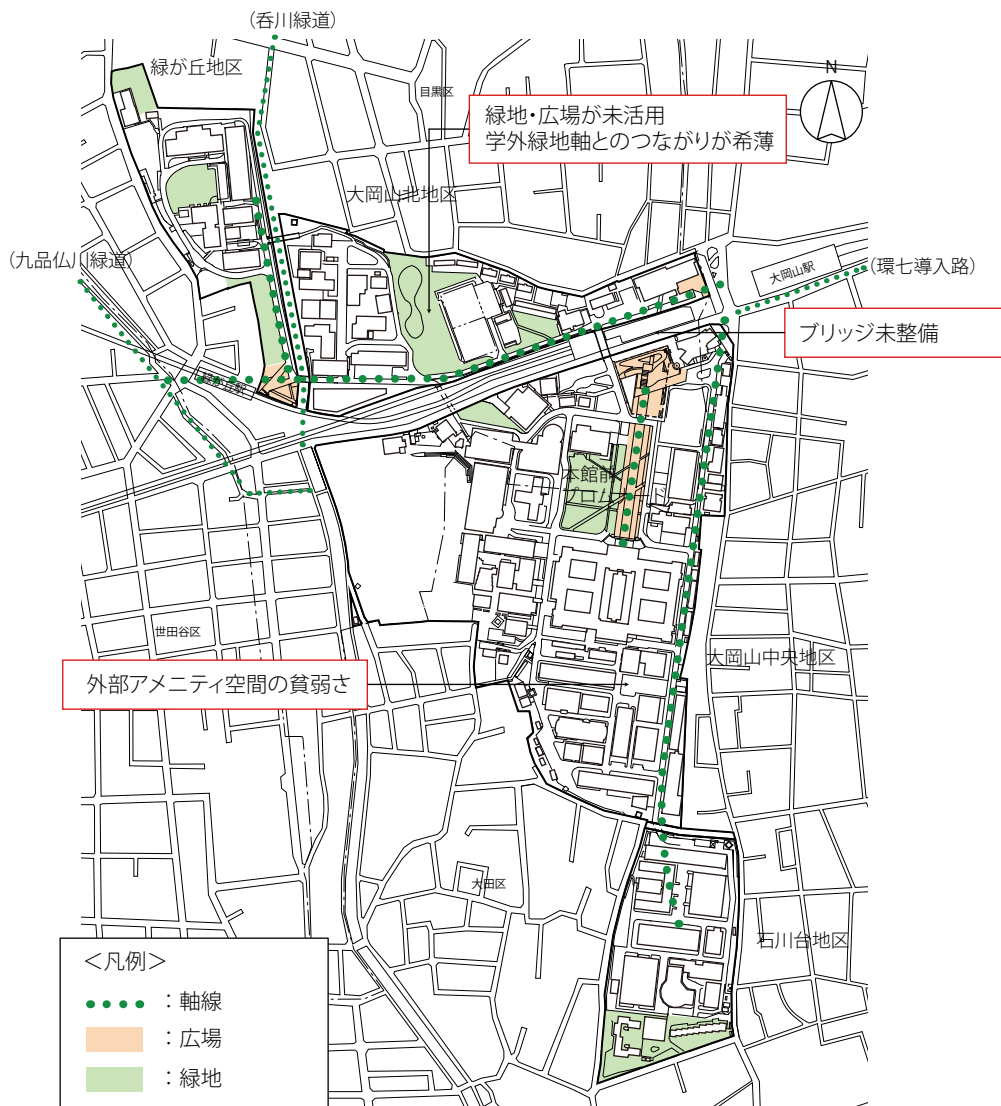


図 3-3 既存軸線と広場の状況及び課題

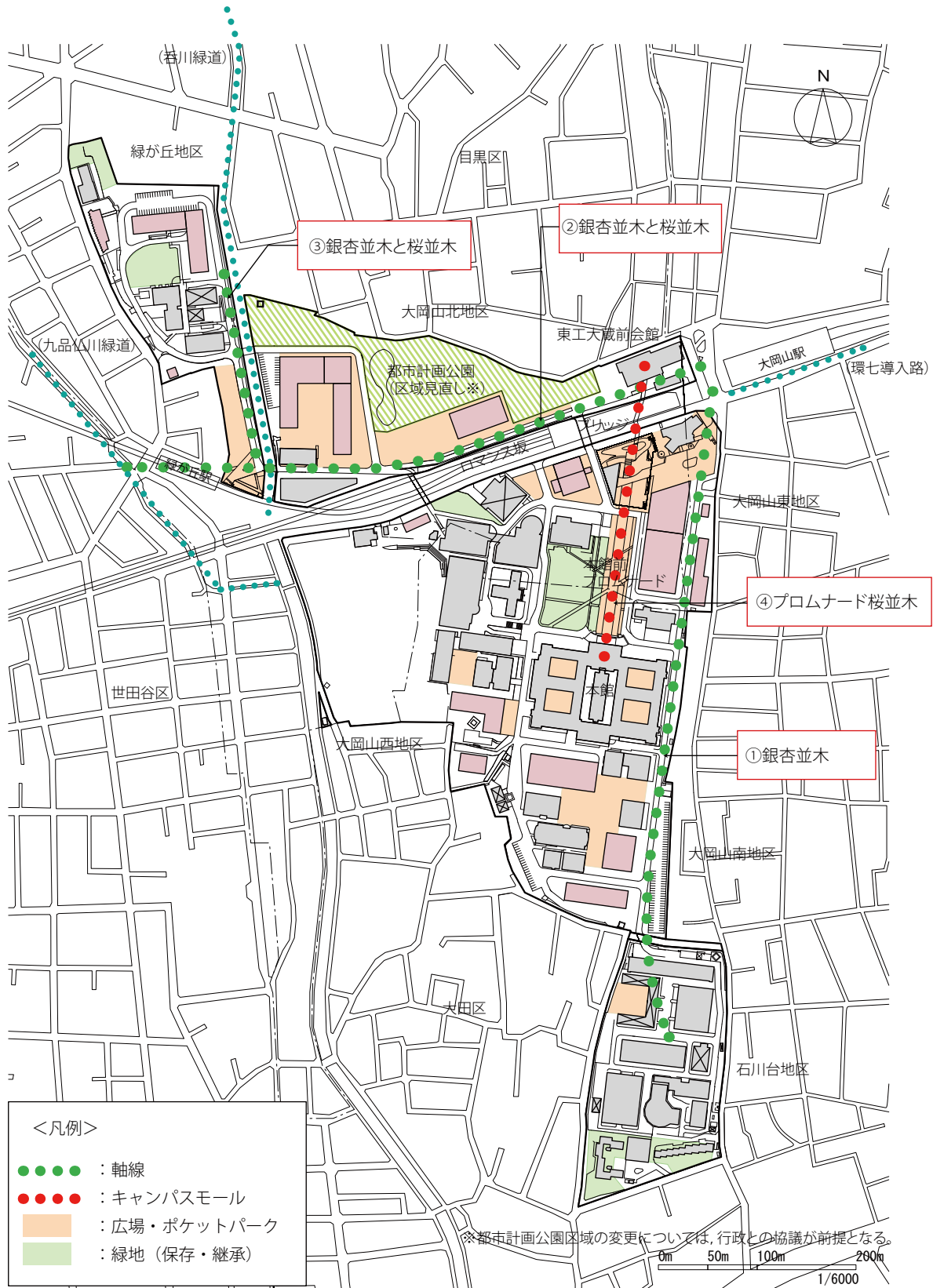


図 3-4 軸線と広場のネットワーク計画

### 3-3. ゾーニング計画

コンセプト：教育・研究ゾーンの適正配置

<継承のルール, 空間のルール>

#### (1) 教育・研究ゾーンの適正配置

キャンパスのメインアプローチである正門周辺を中心に、教育・研究ゾーンが同心円状に配置されており、今後このゾーニングを大きく変えることなく整備を進めていくものとするが、教育・研究ゾーン内での教育エリアと実験エリアの混在等の課題も残されている。

将来計画においては、3キャンパスの総合的利用方針を前提に、再開発後の田町キャンパスの活用や、研究・実験機能のすずかけ台キャンパスへの一部移転等により、次のような教育・研究の特性に応じた再配置を行うことで、ゾーニングの適正化を図っていく。

- ①教育・研究ゾーンについては、附属高校の移転も視野に入れ、建物配置の適正化を図る。
- ②全学科目等の講義室については、学生の利便性に配慮するとともに、入試や外部貸出も視野に入れ、大岡山西地区及び大岡山東地区にまとめていく。
- ③食堂や課外活動施設を必要な位置へ再配置し、学内構成員の利便性向上に配慮していく。
- ④現在ワンストップとなっていない学務関係等の事務スペースを、正門周辺エリアに集約していく。

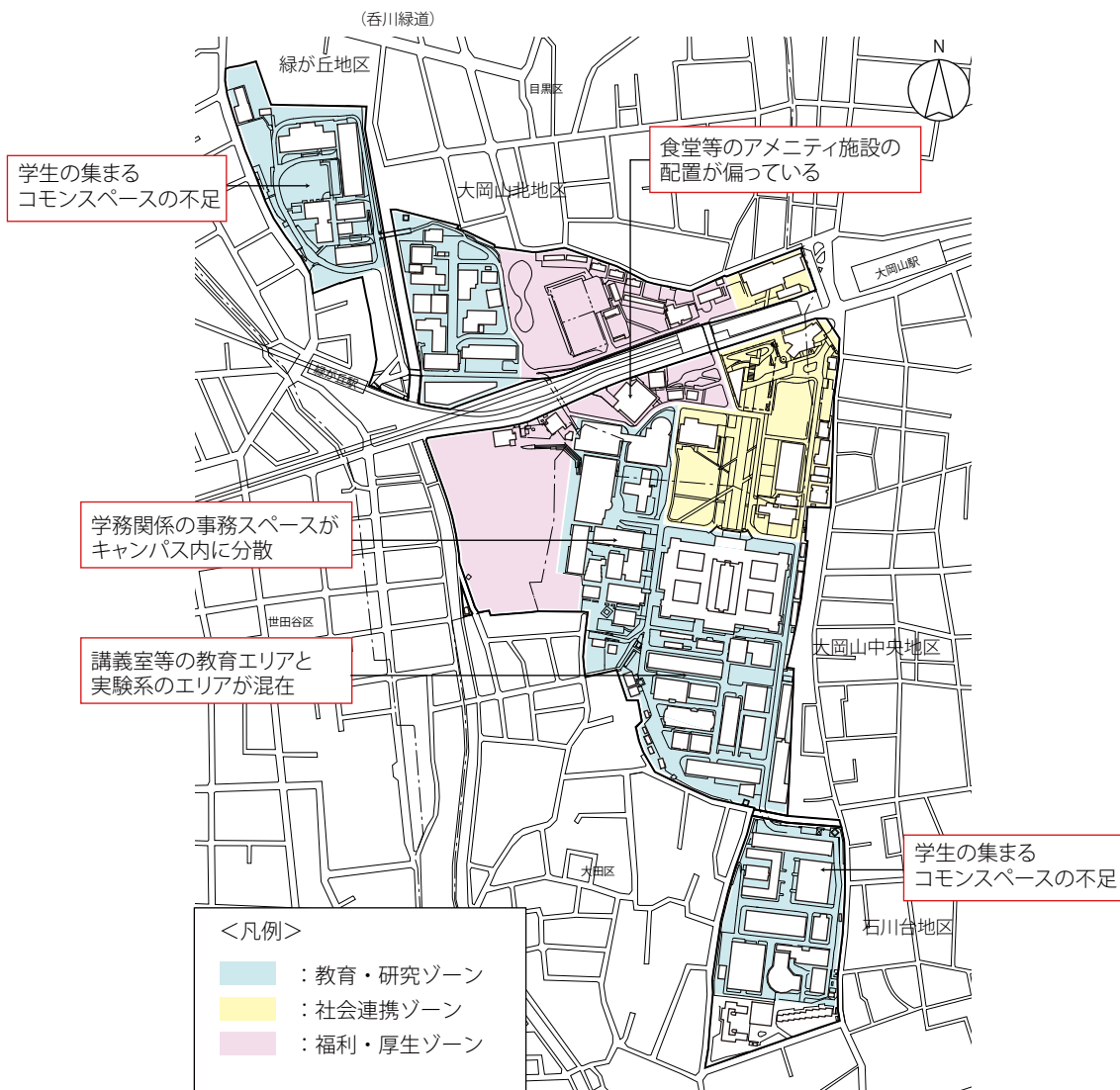


図 3-5 既存ゾーニングと課題



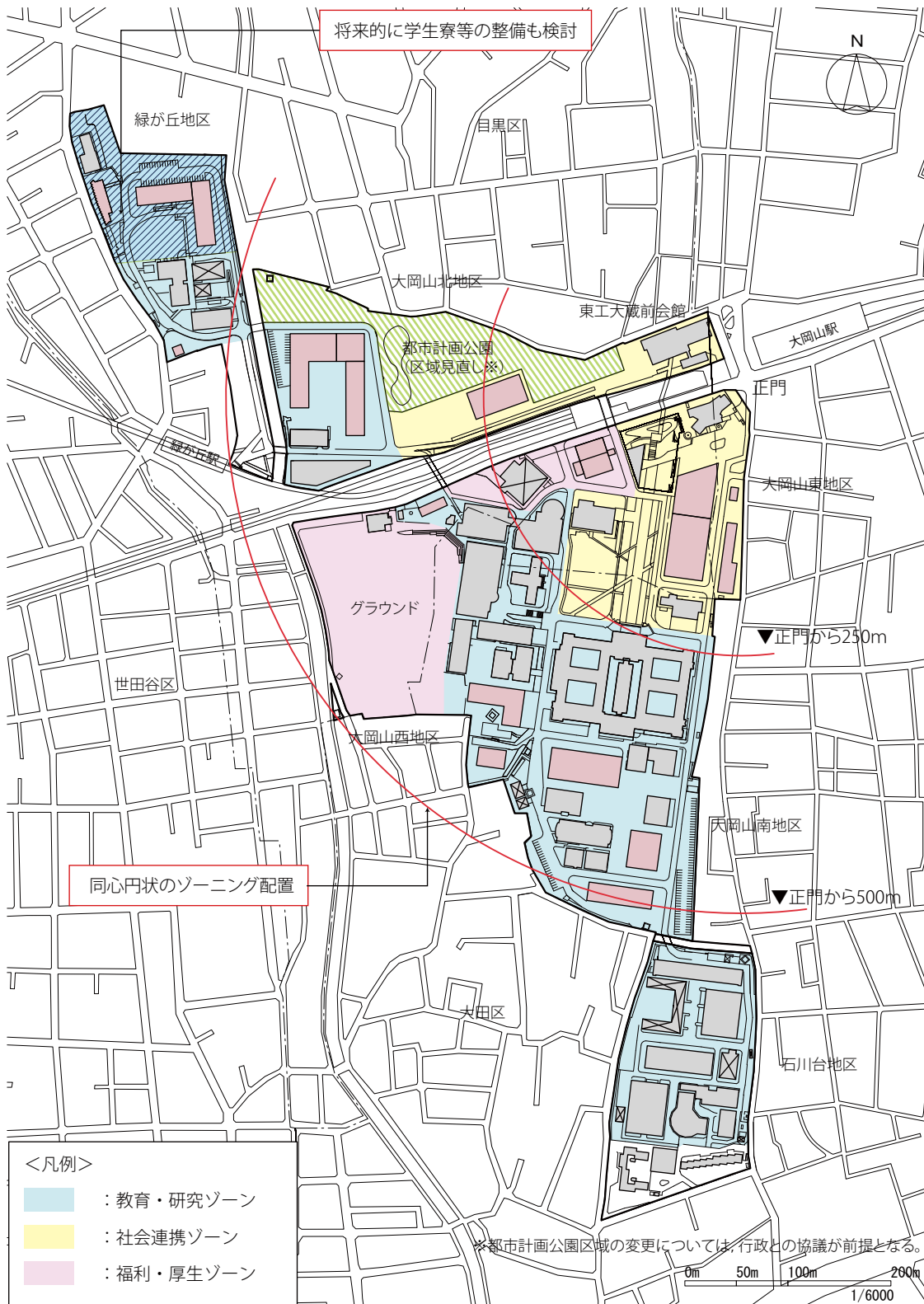


図 3-6 ゾーニング計画

## 3-4. 動線計画

コンセプト：安全な歩行者ゾーンの確保と駐車場の適正配置

<安全・安心のルール>

現状の構内動線は、アンダーパスや狭隘等により危険箇所が多く、また、車両入構が正門のみであることから、歩行者と動線が交錯している状況となっている。

キャンパス内の安全性を向上させていくため、まず正門の車両入構口を変更し、歩車分離を図る。将来的には大学食堂部分からの車両入構口を整備するとともに、ロマンス坂の両方向通行化を行うことで、構内動線の適正化を図っていく。また構内各地区の外周部に主要車両動線を確保するため、大岡山北地区から緑が丘地区へ向かう新たなブリッジを整備し、緊急車両の入退構や工事時の構内通行に対応していくものとする。各地区の外周道路内側は歩行者エリアとし、安全・安心な歩行者空間を確保していく。

また、駐車場は、主要車両動線に沿って必要台数分を整備していくこととし、駐車場については、原則として建物整備に合わせて居住人口に応じた駐輪スペースを必要な場所に適正数を整備する方針とする。

さらに、キャンパス全体が歩行者最優先であることを視覚的にも明示するため、キャンパス内は可能な限りアスファルト舗装を無くし、歩道を主体とした形状と素材による舗装に替えていく。

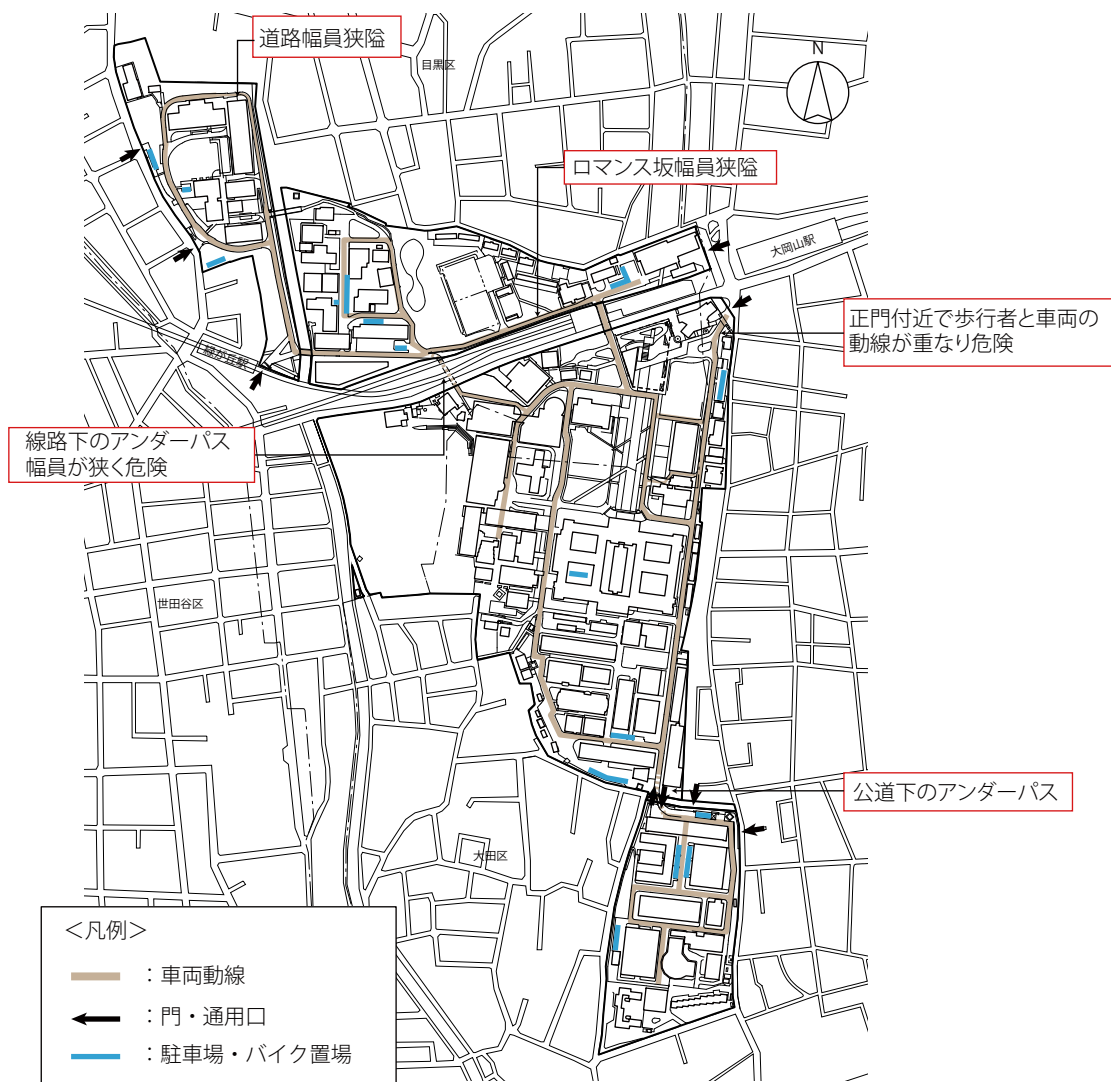


図 3-7 既存交通動線・駐車場配置と課題

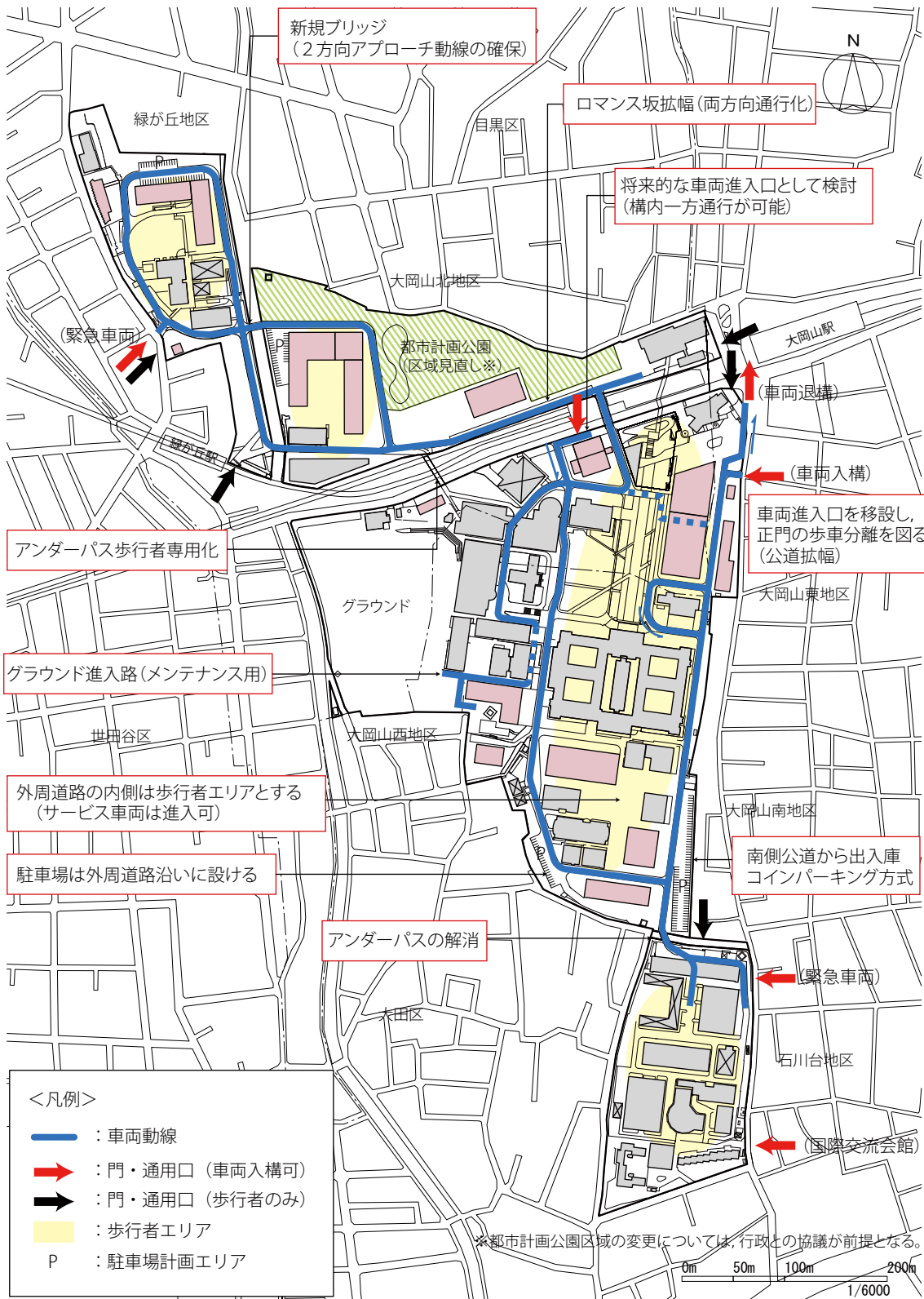


図 3-8 動線計画

### 3-5. 建物・空間整備計画

**コンセプト：歴史と伝統に培われたテクノロジーと文化が薫る空間**

＜継承のルール，空間のルール，建物のルール＞

既存建物は，その規模や経年状況により，長期利用していく建物と積極的に改築していく建物とに区分し，戦略的かつ計画性を持った整備を行っていく。

#### (1) 歴史的建築物の保存・活用と建物景観

東工大蔵前会館から本館前プロムナードへ続くキャンパスモールの周辺にある，本館，大岡山西1号館，70周年記念講堂（以上，登録有形文化財），百年記念館及び事務局1号館などの歴史的建築物は，キャンパスのアカデミックな景観を醸成する重要な要素として保存・継承していくだけでなく，それぞれの建物特性に応じたコンバージョンなどにより，大学施設として積極的に活用を行っていく。

また，新たに整備する建物群については周辺の景観や建物の高さに配慮し，景観上においても伝統と革新が調和するキャンパス環境を実現する。

#### (2) アカデミックな広場空間

既存の広場である，本館前プロムナード及び芝生スロープ，緑が丘6号館前の芝生広場，大岡山北地区の都市計画公園周辺，並びに石川台1，2，7号館に囲まれる桜並木のコートなどを保存・継承していくとともに，現在まとまった広場空間を有していない大岡山南地区や石川台地区にも，今後の改築計画において一定の広場空間を確保していく。広場空間は災害時の避難場所としての活用も視野に入れ，ある程度の広さが確保されるよう計画する。

また，大岡山北地区のひょうたん池周辺の都市計画公園については，目黒区との連携・協力を進め，将来の建物整備と併せて計画区域見直しも含めて検討していくものとする。その際には呑川緑道と都市計画公園との繋がりにも配慮し，地域の貴重な緑地空間として活用していく。

#### (3) 視線の開放を意識したキャンパス空間の整備

ゆとりあるキャンパス空間をめざすにあたり，既存の外部空間の継承及び新たな広場空間の確保だけでなく，視線の開放も意識し，適切な隣棟間隔を確保していく。

- ①東工大蔵前会館から本館を抜け，大岡山南地区まで見通す視線。さらに本館を挟んで大岡山南地区まで続く，一体的な視線軸を通す計画としていく。
- ②大岡山駅前広場から正門を抜け，本館時計塔を臨む視線。旧図書館跡地に計画する建物については，この視線を意識し，建物高さ・規模を計画していく。
- ③本館前からグラウンドまで見通す視線。将来的に屋内運動場の改築を行う際には，本館前からグラウンドを見通せる，キャンパス東西方向の空間の抜けを創出していく。

1 80周年記念館は，本学80周年記念事業として基金により整備された建物であるが，他の記念建物（歴史的建築物）とは違い設計に関して本学教員を含む建築家の関与はないため，将来計画を優先し解体する計画とした。

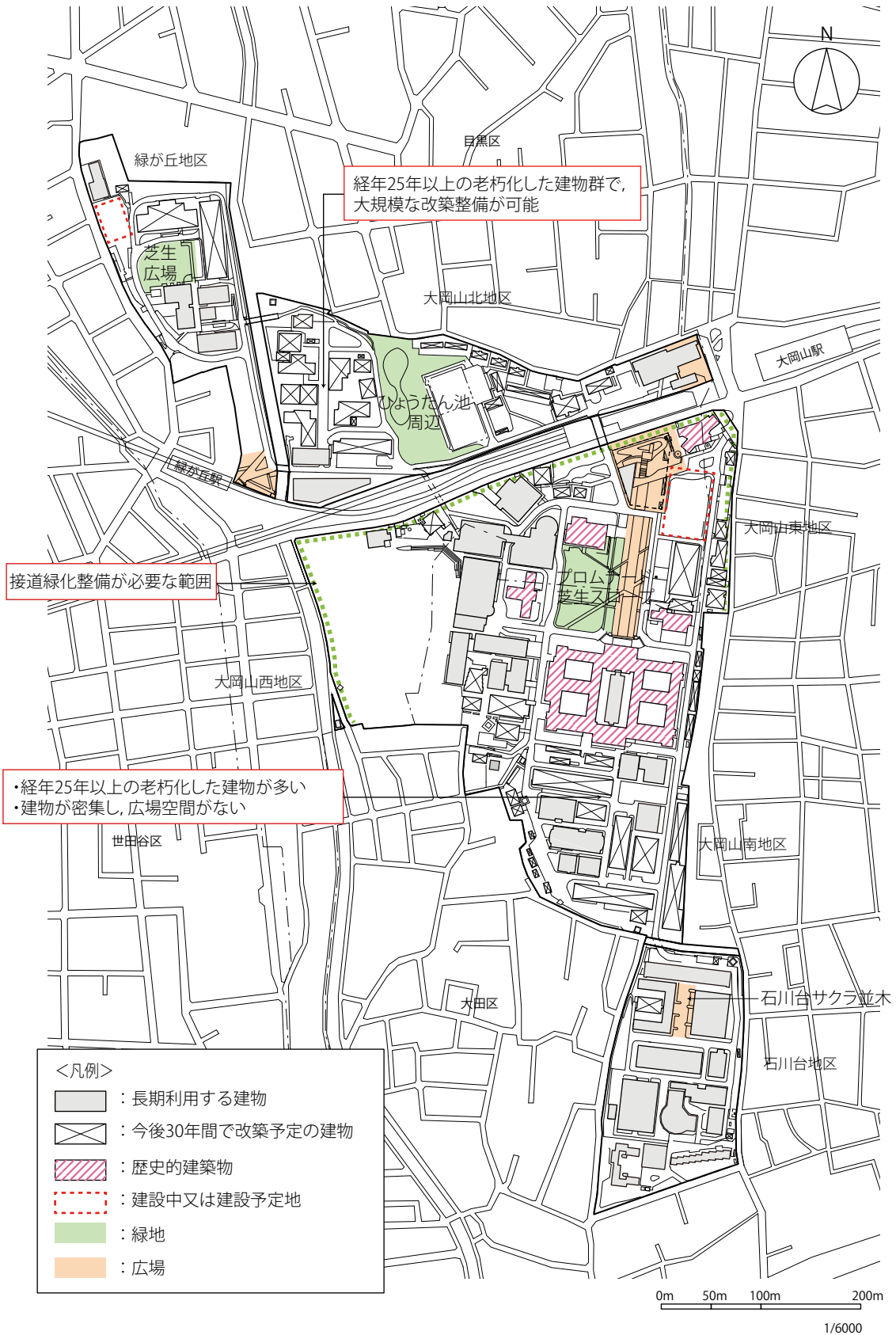


図 3-9 既存建物配置と外部空間配置状況

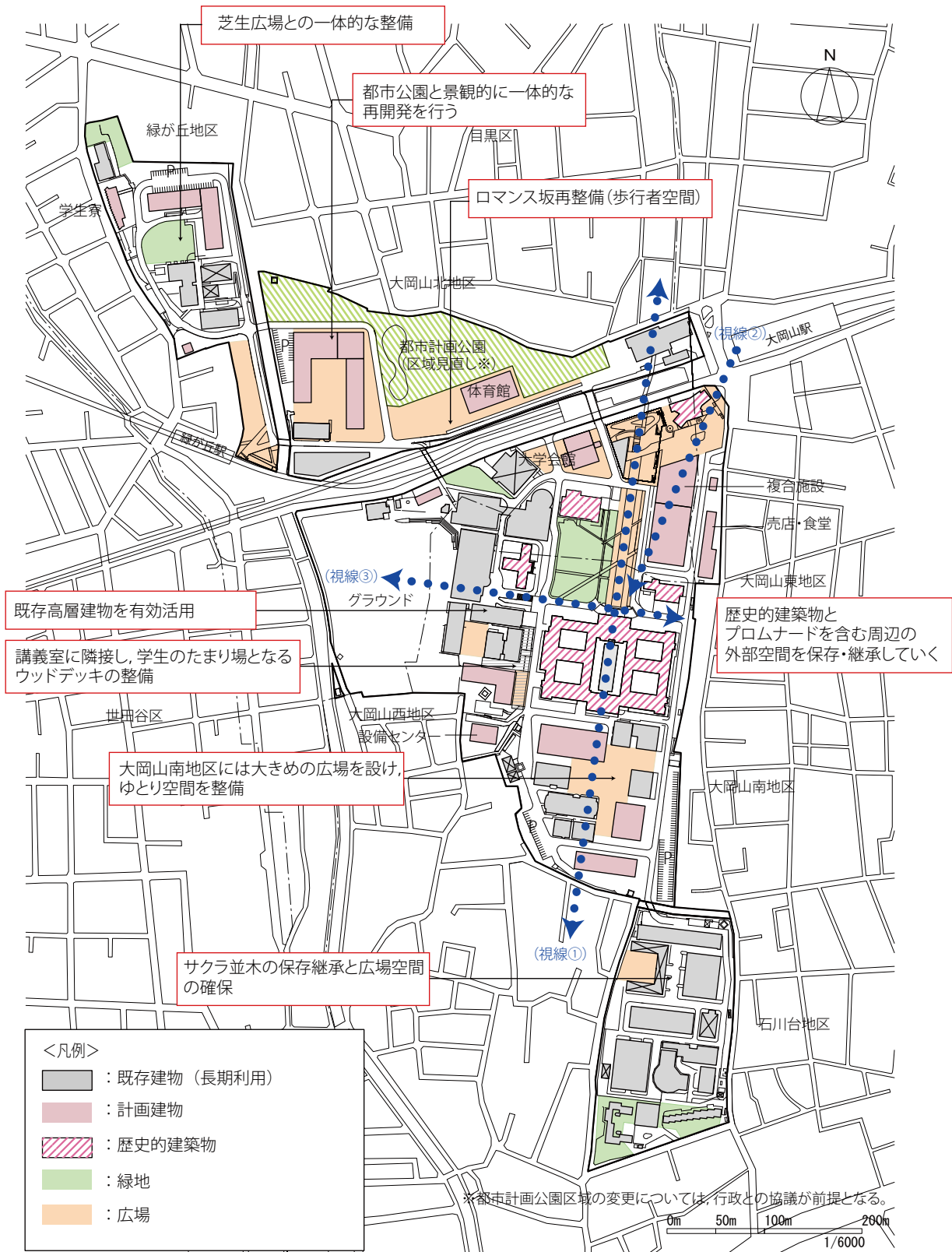


図 3-10 建物整備構想と外部空間の配置計画



図 3-11 保存・継承すべきキャンパスモール周辺の景観（本館からの眺望）

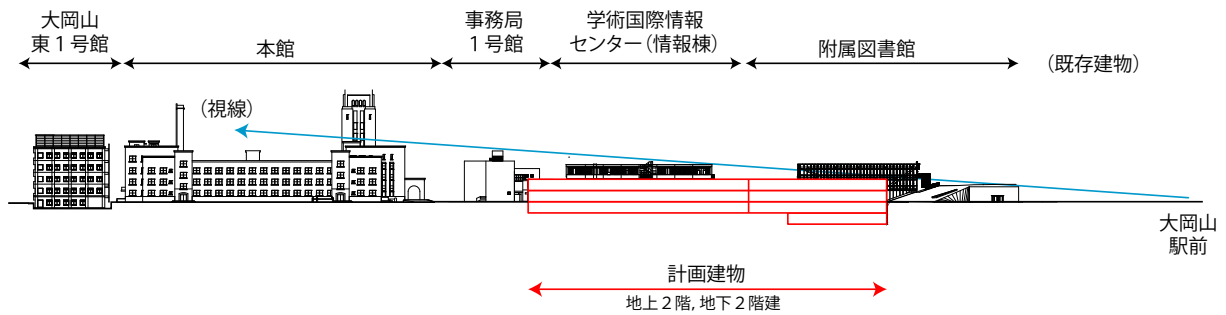
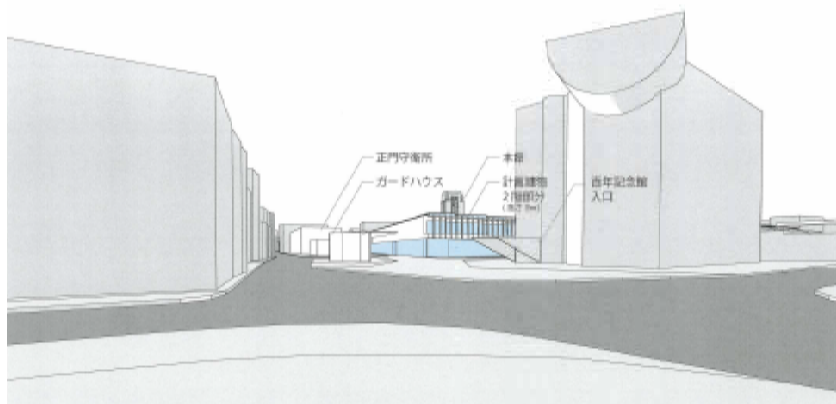


図 3-12 駅前広場からの視線開放イメージ



※安田幸一研究室 提供

図 3-13 駅前広場からの眺望イメージ

#### (4) 本学の「顔」としての多機能空間

本館前プロムナードを取り囲む本館、70周年記念講堂、附属図書館及び百年記念館を含む本学の「顔」となる正門周辺エリアを、大岡山駅前広場や東工大蔵前会館と密接な関連をもった社会連携ゾーンとして位置づけ、地域・社会との接点となる多機能空間として整備する。

本学が行っている教育・研究の成果や取組を、広く学内外に情報発信し、地域・社会との繋がりをもたせるため、社会連携ゾーンにおける建物・施設については、外へ顔を向けた整備を行っていく。特に百年記念館（東工大博物館）や東工大蔵前会館など、情報発信機能を担う施設については、積極的に外部へ開いていく。旧図書館跡地の新棟整備やそれに続く学術国際情報センターの改築整備においては、大学の機能強化・発展とともに大岡山周辺地域の活性化も視野に入れた計画を行っていく。

また、本館及び事務局1号館についても、3キャンパスの総合的利用方針に基づくゾーニングの整理と合わせ、コンバージョンも含めた活用方法の見直しを行う。

#### (5) キャンパス開放とセキュリティの考え方

大岡山キャンパスは住宅街に立地していることから、周辺地域が本学と共に発展してきたことも考慮し、少なくとも開学時間においては、学外者が一定程度キャンパス内の外部空間を利用することができるよう配慮していく。一方で教育・研究ゾーンについては、セキュリティや安全確保の観点から、本学関係者以外が立ち入らないエリアを明確化する必要がある。エリア一帯での出入管理は困難であるが、サイン等により立ち入り禁止エリアを明確化するとともに、建物単位での重要度に応じたセキュリティ管理を行うなどの対応により、セキュリティとセーフティに十分考慮した空間整備を行っていく。

なお、本館のように多方向からの出入りが可能な建物については、上記のような対応は困難であることから、今後の組織・機能の再配置に伴い、建物の使い方を再検証していく。



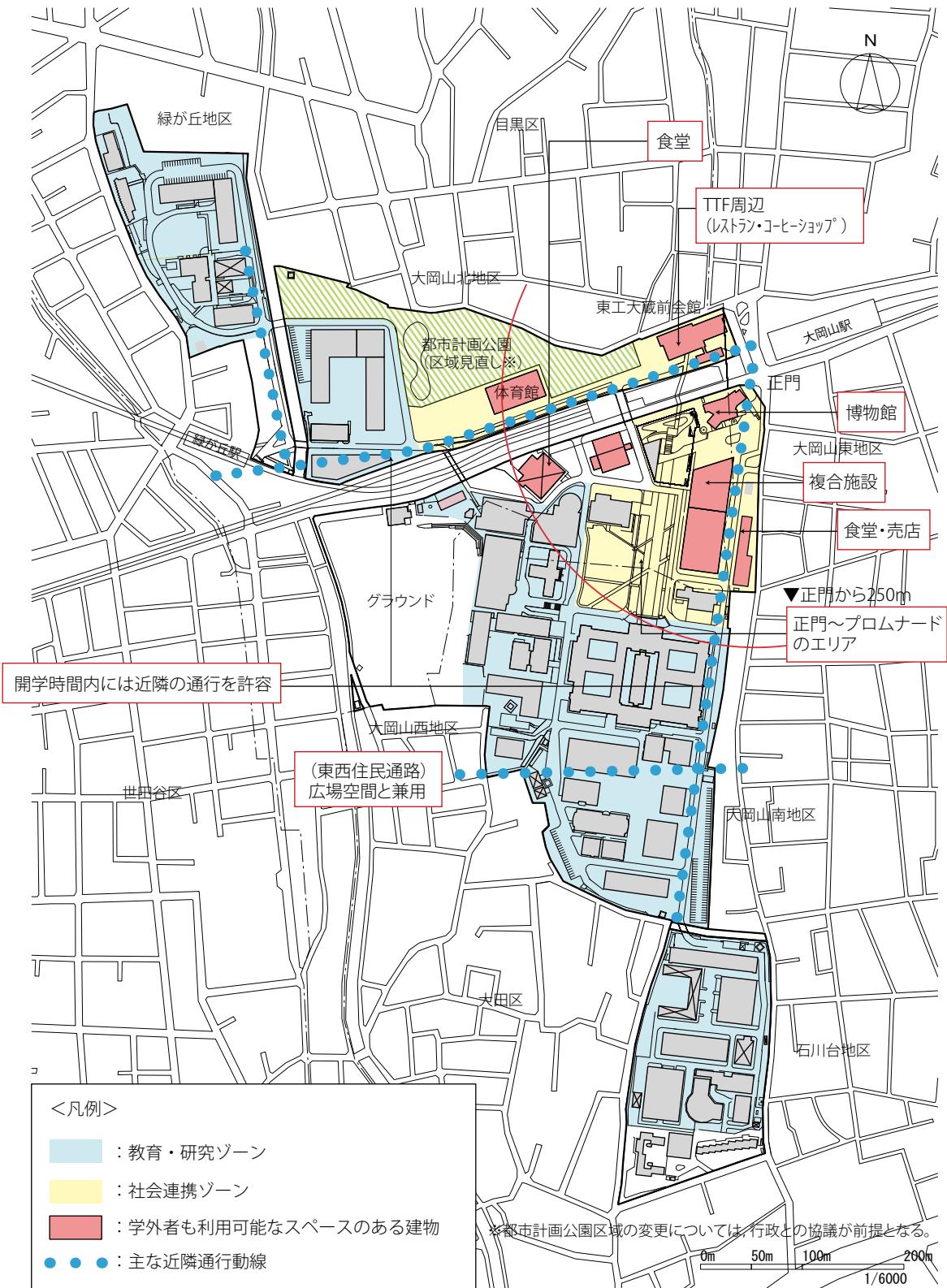


図 3-14 社会連携ゾーンと近隣動線

### 3-6. インフラ・エネルギー計画

#### コンセプト：持続可能なインフラネットワーク

<インフラのルール>

大岡山キャンパスは、線路、河川及び公道により分断されており、高圧電線管路が敷地境界堀に頼って設置されていることや、共同溝が十分整備されていないことから埋設管路の更新に際して必ず土工事が必要となるなど、インフラの維持管理、更新に苦慮している状況である。

これらを解消していくため、まずインフラの中核であり老朽化している特別高圧変電室や He 回収設備を有する極低温研究支援センター等を大岡山西地区に改築・集約した上で、建物整備とあわせて共同溝や電力通信管路を順次整備していく。将来的には線路で分断された大岡山北地区にサブエネルギーセンターを整備するなど、各地区の事業継続性（BCP）を確保することも検討していく。

また、施設の省エネルギー化や二酸化炭素排出抑制を推進するとともに、太陽光発電設備等の再生可能エネルギーによるスマートキャンパスの実現に向けた計画を進めていく。学術国際情報センターの経年進行に伴い、本学が誇るスーパーコンピューター TSUBAME の移転先を含めた今後の在り方についても検討を進めていく必要がある。

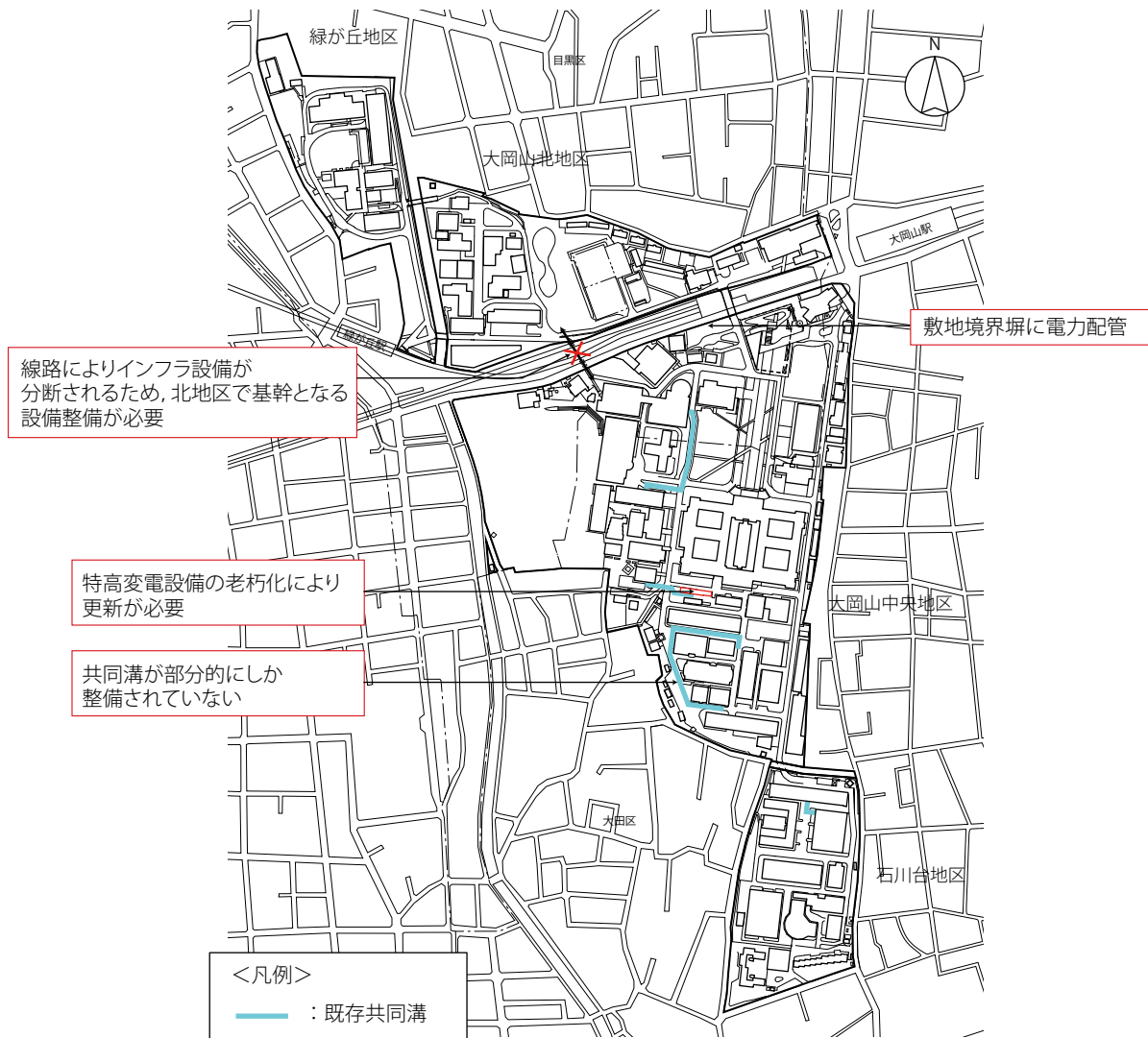


図 3-15 既存インフラ状況

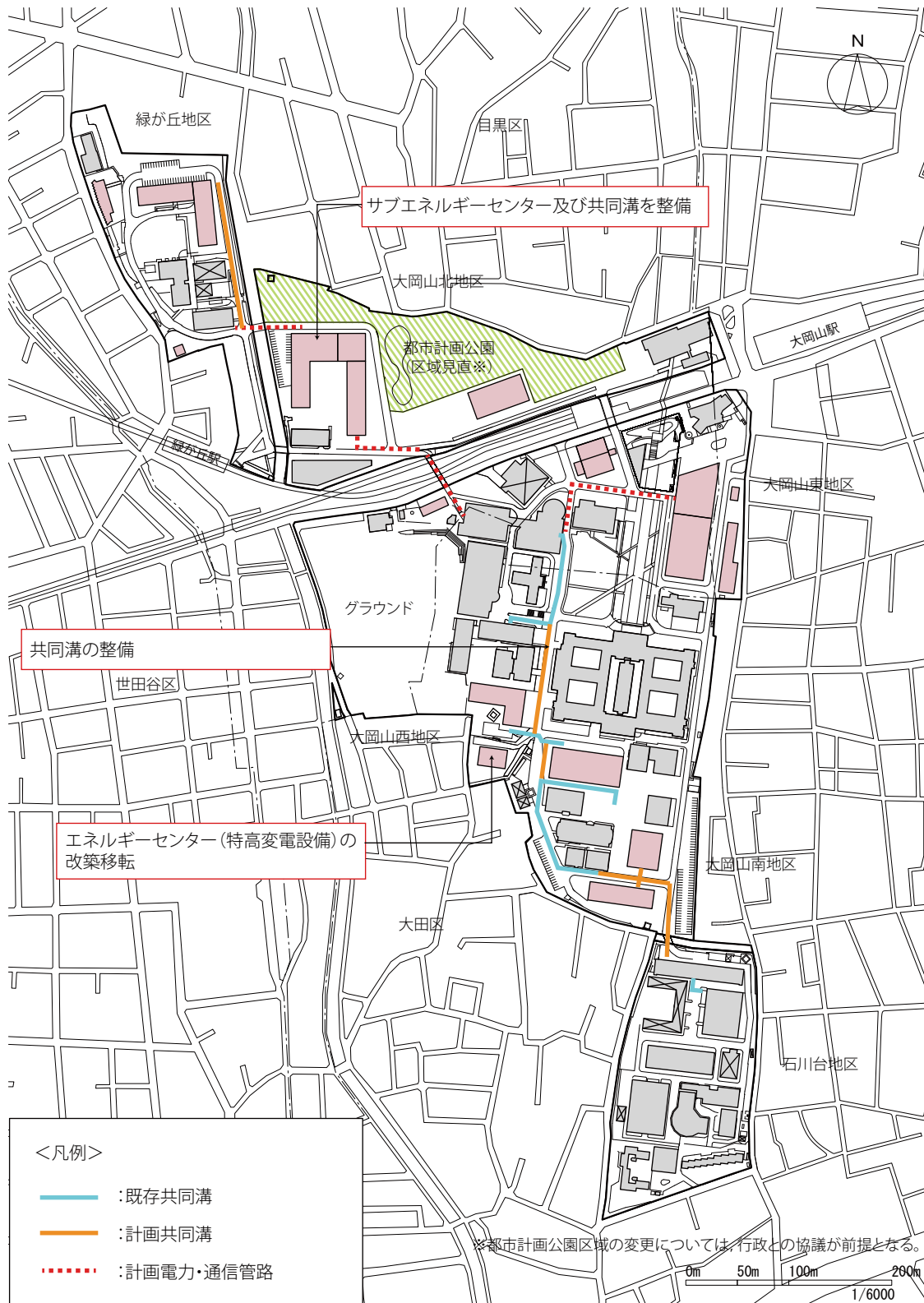


図 3-16 インフラ・エネルギー計画



#### 4. すすかけ「ペリパトスの研社2 1」将来計画

#### 4-1. 目指すキャンパス将来像

ずずかけ台キャンパスの現状配置図と将来目指す計画配置図を示す。この将来計画配置図は、概ね60年後の目標である。以降、本章においては、この将来像実現に向けた30年後のフレームワークプランを示す。

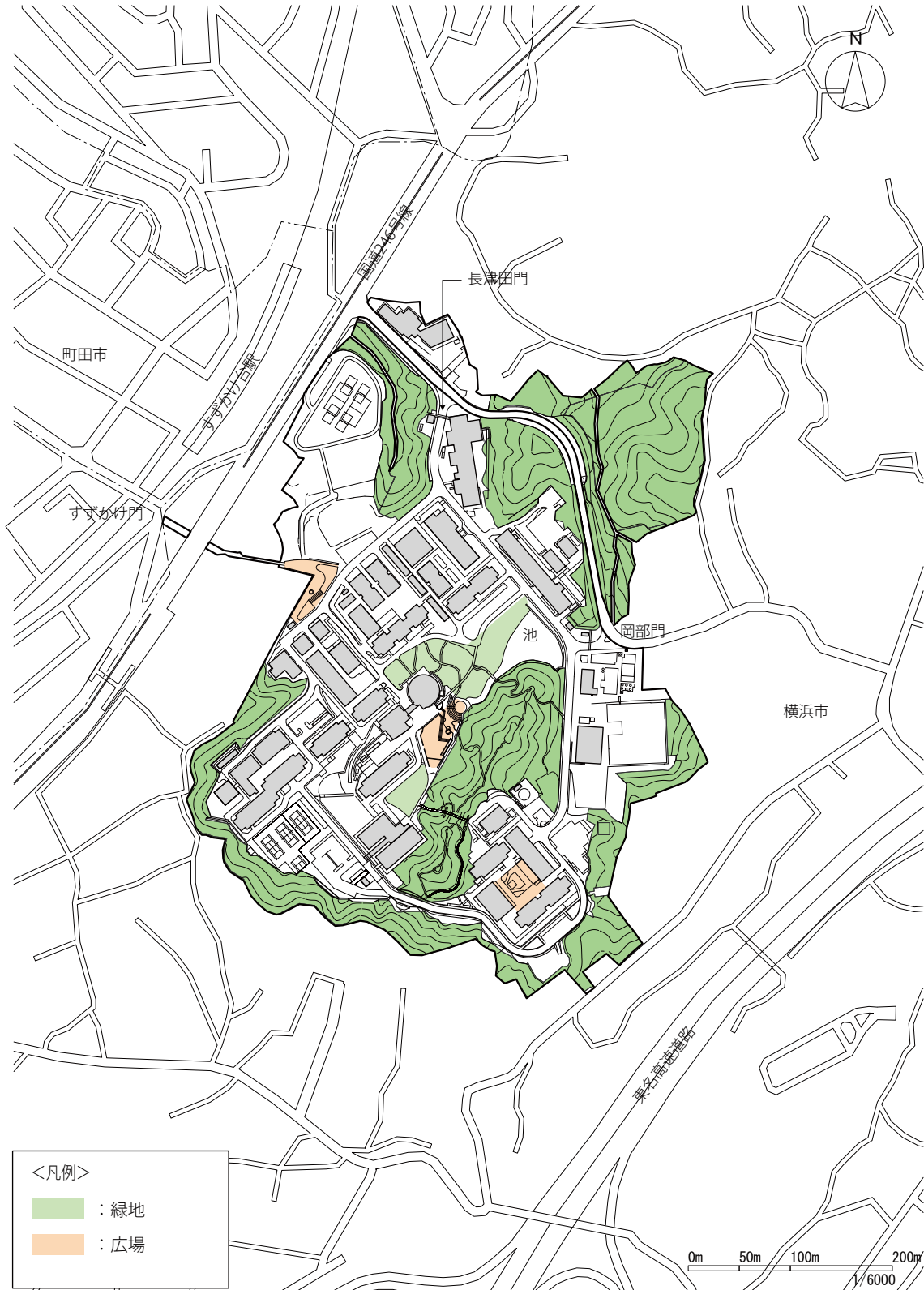


図4-1 すずかけ台キャンパス現状配置図



図 4-2 将来計画配置図 (60 年後)

## 4-2. 軸線計画

コンセプト：シンボリックなツインコリドーとペリパトスネットワークの形成

<継承のルール, 空間のルール>

ずずかけ台駅から至近であるずずかけ門は、元来通用門として整備されたものであるが、2008年に拡幅され現在はずずかけ台キャンパスのメインアクセスとして機能している。キャンパス利用者はずずかけ門からキャンパス内の各エリアへ向かうが、事務組織機能がキャンパスの奥に位置していることや、敷地の高低差があるために、動線上、東西方向の連携が取りにくい等の課題がある。

### (1) シンボリックなツインコリドーとスカイウェイ

ずずかけ台駅から本キャンパスに直結するトンネル(ずずかけトンネル)を整備し、トンネルを出たずずかけ広場を含めた、新しいエントランス・ゲート機能を配置していく。さらに、エントランス・ゲートからキャンパス中心部にある中央広場とを結ぶ歩行者デッキ(スカイウェイ)を整備し、ずずかけ広場からつながる2つの道(スカイウェイと大学会館へと至る道)を、本キャンパスの主要軸線となるツインコリドーとして位置づける。

また、高低差の激しい本キャンパスの快適な歩行者動線を確保するため、ツインコリドーと直行する形でB1B2棟方面から将来計画である学生寮・ゲストハウス(現在の図書館ずずかけ台分館)へ至る歩行者デッキを整備していく。

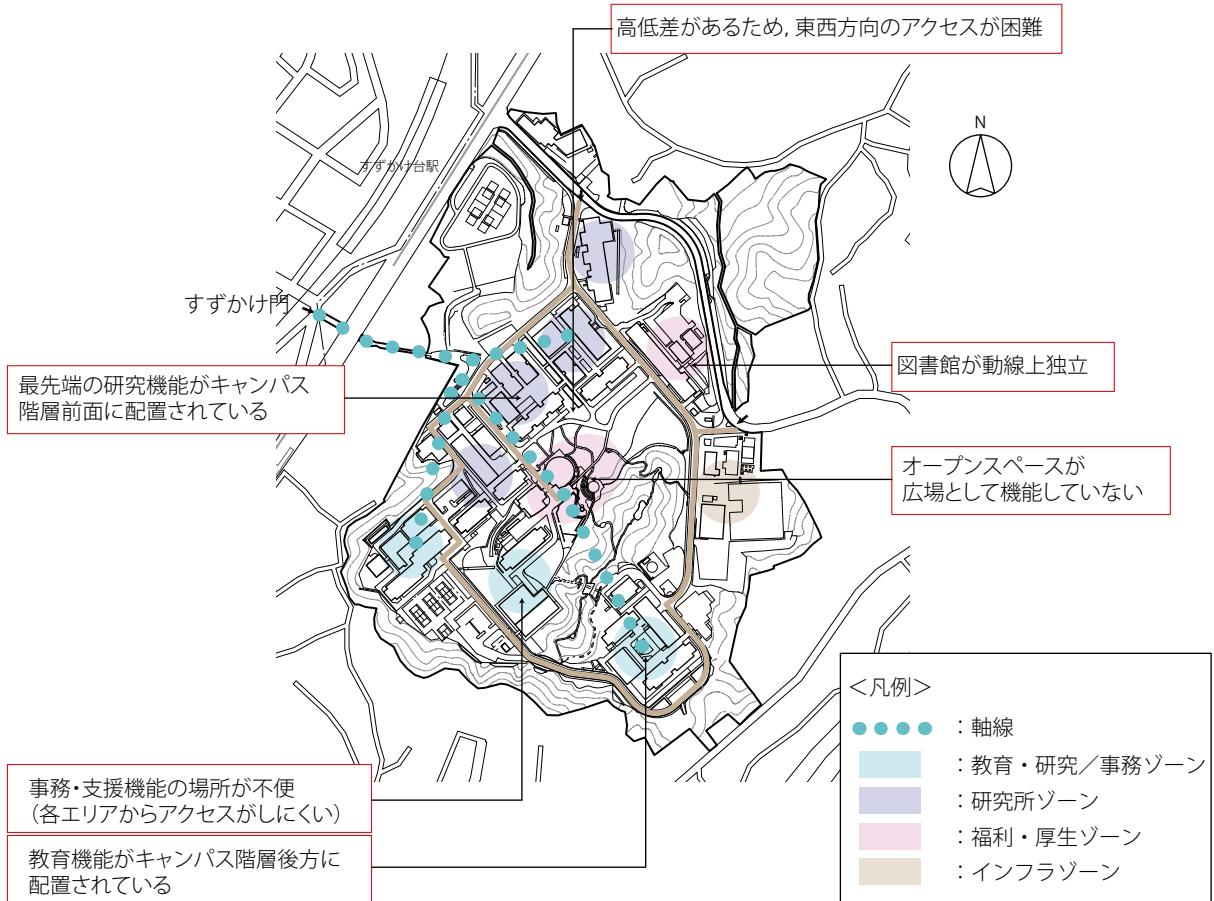


図 4-3 既存軸線とゾーニング





図 4-4 軸線とメイン広場の関係図

## (2) ペリパトスネットワークの形成

すすかけ台キャンパスでは、歩行者ネットワークと広場空間とを結び概念をペリパトスネットワークと定義し、加藤山散策路まで含めたキャンパス内の多層的な歩行者ネットワークを張り巡らせる計画とする。

キャンパス内の道路は全て歩行者優先とし、歩行者の視点から次の4種類で構成する。

- ①歩行者専用路（歩行者のみ通行可能な通路及びデッキ）
- ②散策路（歩行者のみ通行可能な狭幅員の通路）
- ③歩行者優先道路（歩行者優先で自動車も走行可能）
- ④歩道設置道路（歩道が設置された道路であるが、歩行者は道路のどこを通行しても良い）

広場空間は、エントランス部のすすかけ広場、キャンパス中央部の中央広場の2つの他に、まとまったエリア毎に小規模な広場空間を整備していく。



図 4-5 ペリパトスネットワーク

## 4-3. ゾーニング計画

コンセプト：自然と共存するキャンパス空間

<空間のルール, 緑のルール>

すずかけ台キャンパスは、周辺を山林に囲まれた敷地形状であり、構内の自然山林である加藤山を中心に教育研究施設が配置されている。今後も横浜市と保存協定を締結している自然緑地を維持保全していくとともに、将来開発可能なゾーン・地区についても明確化しておく。

また、3キャンパスの総合的利用方針により「研究・実験の場」として位置づけられていることから、研究・実験に特化した効率的なゾーニングを行っていく。キャンパスのセンターコアとして加藤山裾の中央広場周辺を一体的に整備し、研究・実験ゾーンを外周道路に沿って配置することで、まとまりのあるキャンパス空間の醸成と研究・実験機能の効率化を図っていく。また、すずかけ広場から中央広場に至るエリアには、情報発信や教育機能、事務支援機能を集約し、学内外の利便性を向上させていく。

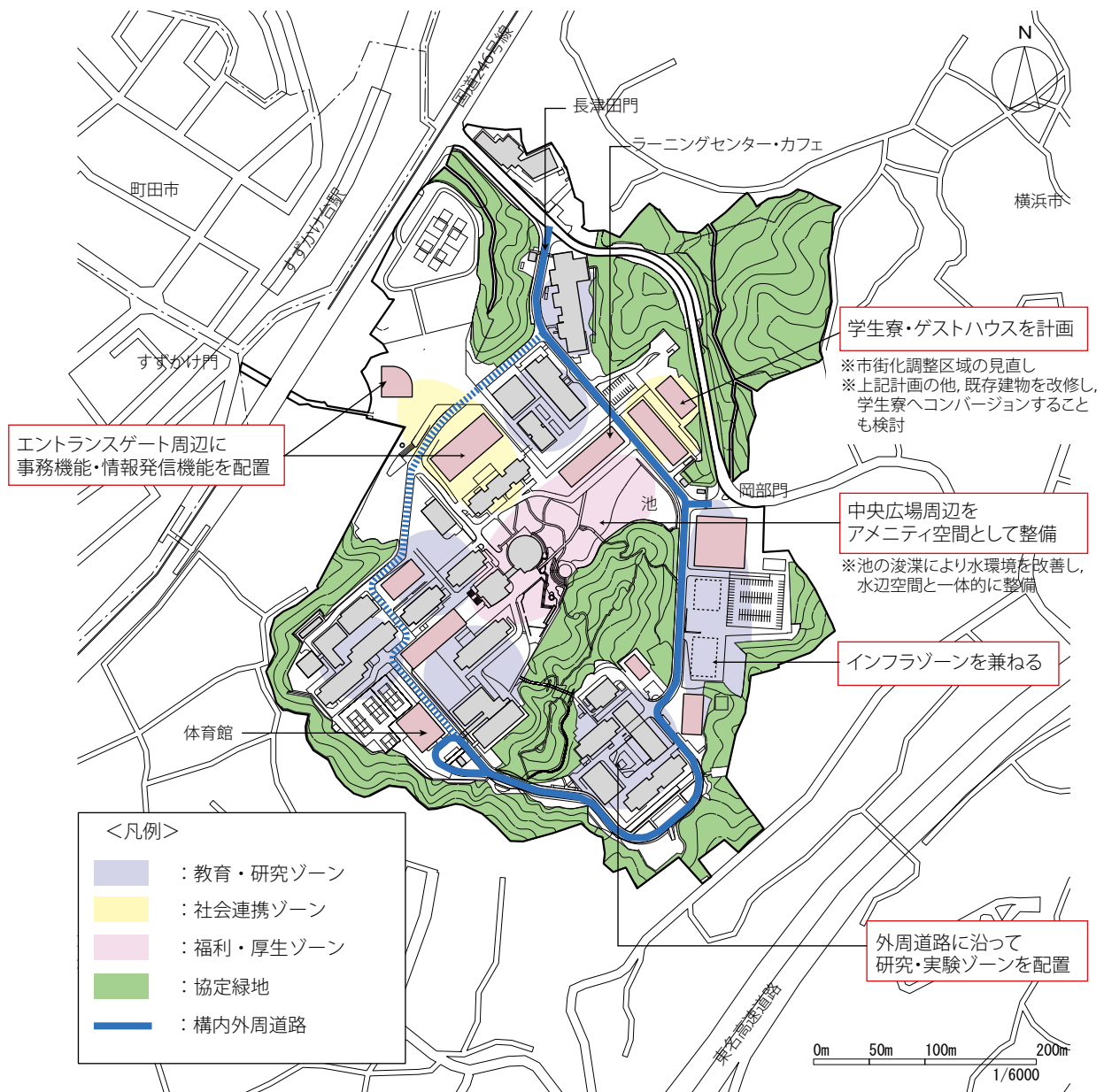


図 4-6 ゾーニング計画

#### 4-4. 動線計画

コンセプト：外周道路への駐車場配置と安全安心な歩行者ゾーン

<安全・安心のルール>

キャンパス外周道路は2016年にループ化が完了しており、大きな動線の変更は不用であるが、すすかけ門からの歩行者動線と車両動線がかさなっており、運用ルールの変更が必要である。

将来的な運用としては、緊急車両やサービス車両を除き、長津田門から時計回りでB1B2棟方面へ向かい、J2J3棟南側で転回して戻るといった交通ルールとし、廃水処理施設を整理し立体駐車場を整備するなど、駐車場を外周道路に直結した場所に限定していく計画とする。

外周道路内部の歩行者優先ゾーンへは、物品の搬出入など特定の目的の車両が停車するスペースを最小限配置するに留め、通勤車両などの長時間駐車を排除することとし、すべての道路は歩行者優先の理念のもとで、安心して歩きやすい環境整備を行っていく。

また、キャンパス内の舗装は、外周道路を除き可能な限りアスファルト舗装を無くし、歩行者優先であることが一目で分かるような景観に配慮した素材に切り替えていく。

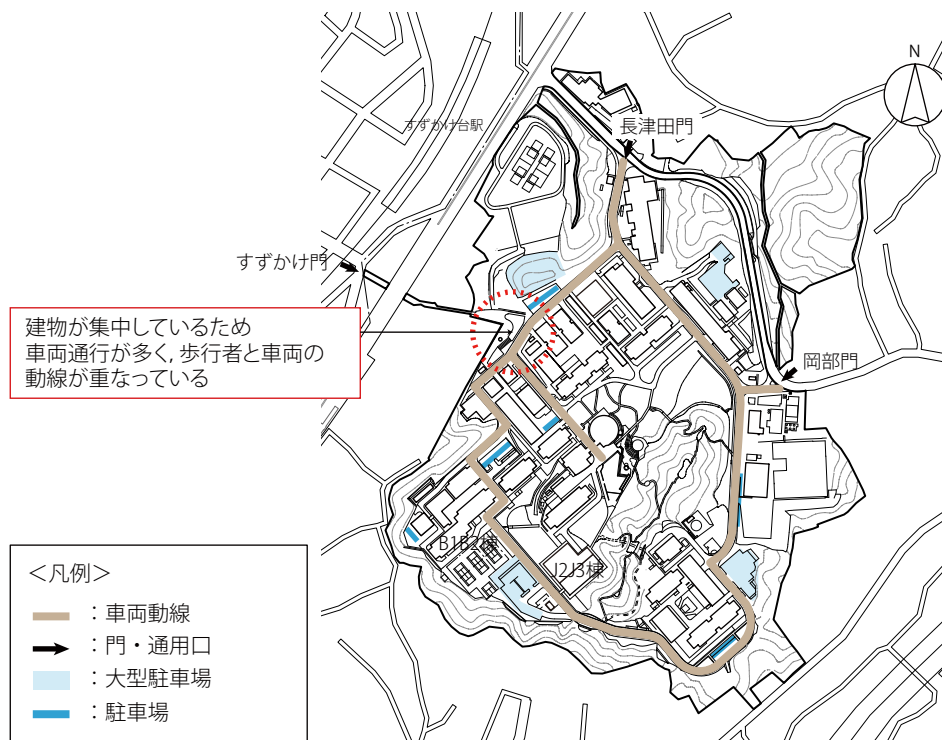


図 4-7 既存交通動線・駐車場



図 4-8 交通動線・駐車場計画

## 4-5. 建物・空間整備計画

コンセプト：既存ストックの活用と人を重視したキャンパス環境

<空間のルール, 建物のルール, 緑のルール>

## (1) 既存施設の長寿命化をメインとした建物整備計画

すすかけ台キャンパスは1970年代に一気に開発整備がされたことから、現時点で改築が必要な経年状況にはないが、近い将来、開発当初に建てられた建物が一斉に改築時期を迎えることとなる。また都市計画や日影の規制により建築可能な建物高さに制約が生じていることから、既存の高層建物を長寿命化し有効活用していくことが中期的な課題となっている。

そのため、本キャンパスの建物整備は、大きく2段階の計画となる。当初12年間（～2027年）においては、既存高層建物の大規模改修、限られた整備予定地への建築及びそれに伴う小規模建物の集約が主体となり、今後13年目以降（2028年～）においては大規模建物の改築計画が主体となっていく。

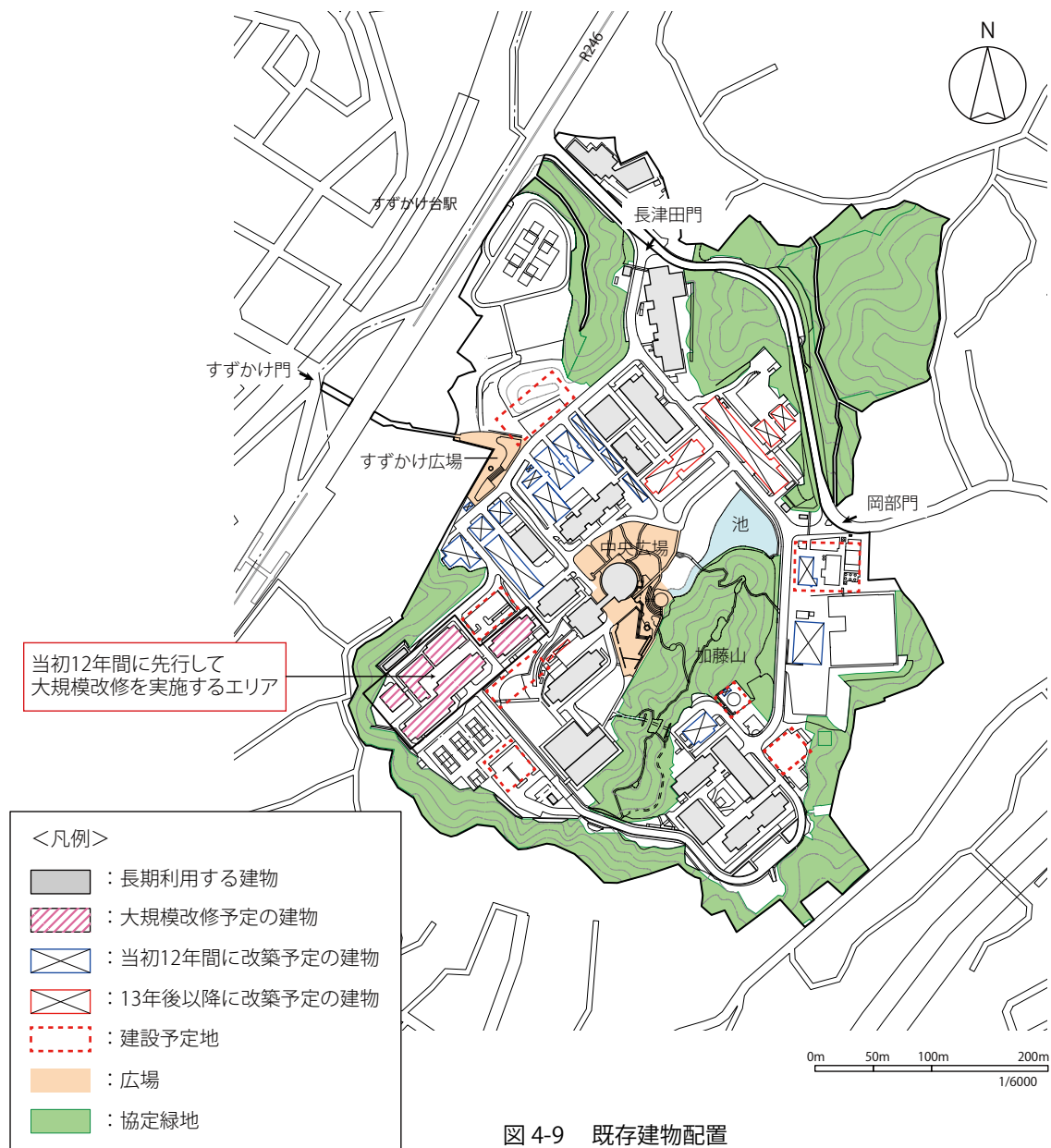


図 4-9 既存建物配置

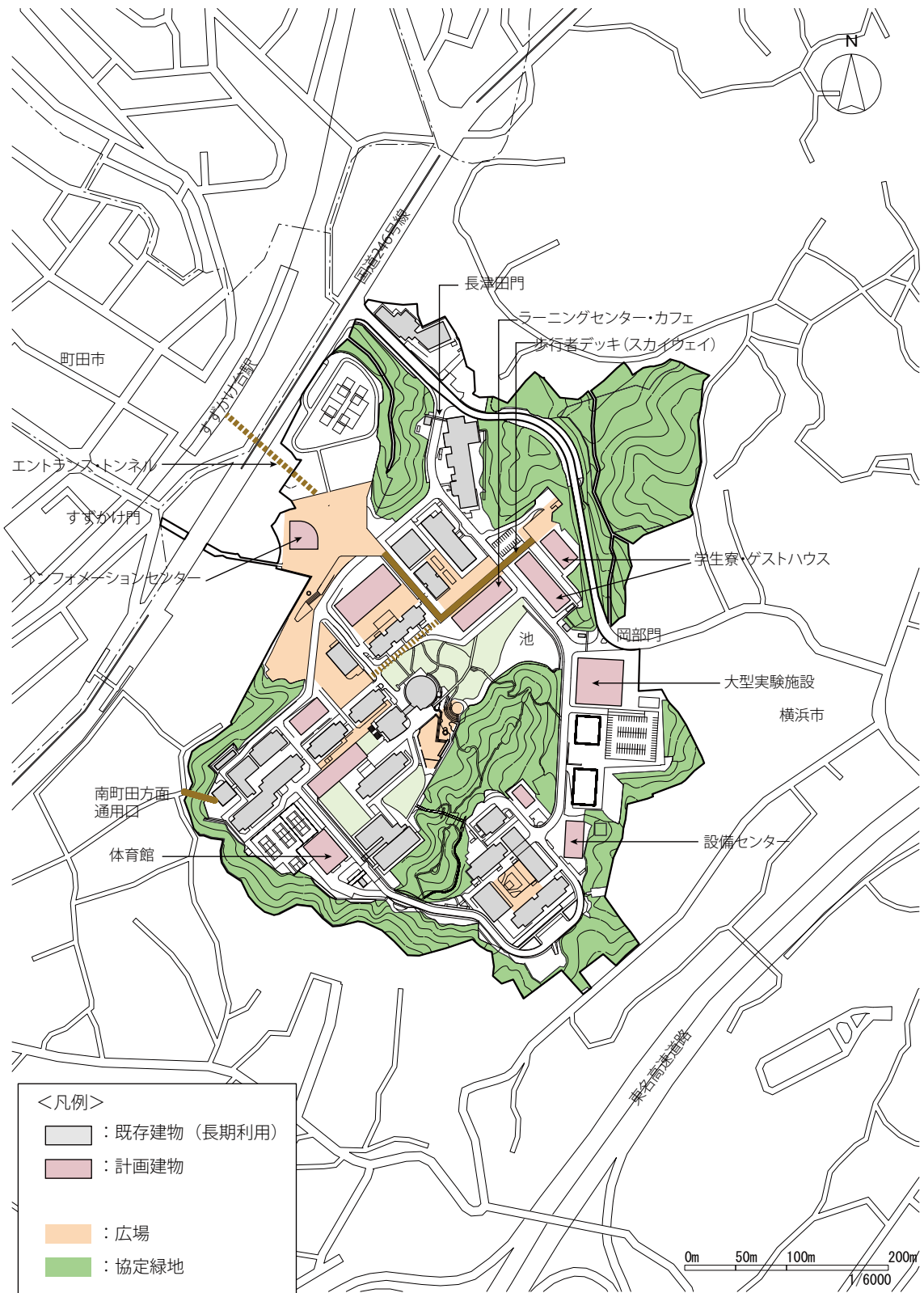


図 4-10 建物配置計画

## (2) コモンスペースと福利厚生施設の整備

キャンパス外の状況もふまえ、学内利用者の利便性を向上させるため、キャンパス内に食堂、売店及び運動施設などの福利厚生施設を充実させていく。スカイウェイに接する建物低層部に、ピロティやコモンスペース等を配置し、誰もが利用できる快適空間として整備する。東西に繋がるスカイウェイの両端には、学生寮・ゲストハウスと体育館・テニスコートを配置し、ツインコリドーとの結節点となる中央広場周辺に食堂、カフェ等をゾーニングすることで、キャンパス内の動線を活性化させていく。

建物の整備に際しては、キャンパス開発当初の計画思想を念頭に置き、協定緑地を保存・継承していくとともに、限られた建築可能敷地において必要な広場空間を確保していくため、できる限り建物を高層化する。

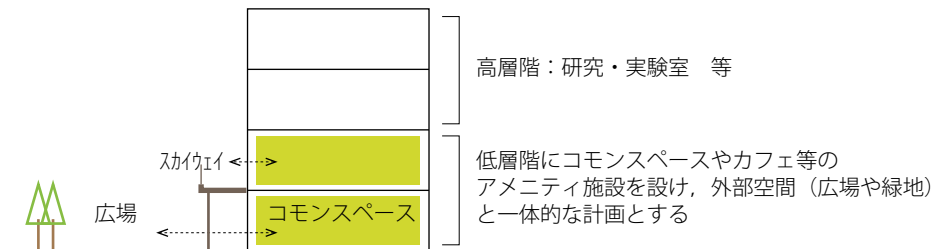


図 4-11 スカイウェイとコモンスペースの関係性

## (3) セキュリティ計画

本キャンパスは、周辺環境の違いもあって周辺住民等のキャンパス外部空間の利用に際して大きな問題が生じている状況にはないが、研究中心のキャンパスであり、安全管理・知財管理の観点から建物としてのセキュリティをとっていく必要がある。原則として建物低層階やスカイウェイに隣接するエリアは共用空間として計画し、高層階の研究・実験スペースについては、必要に応じてフロア単位等のセキュリティ区画を形成することで対応していく。

## (4) 外部パブリックスペースの重視

キャンパスにおける外部空間は、研究の合間の息抜きや研究者同士の語らいの場として、研究者・学生にとって重要な要素であり、特にキャンパス周辺に商業施設がない本キャンパスにおいては、優先して検討すべき事項である。メインエントランスとなるすすかけ広場と中央広場を周辺計画建物と一体的に先行整備し、本キャンパス特有の豊かな自然環境とあわせた魅力あるキャンパス空間を創出していく。

## (5) 地域・社会への貢献

本学は、横浜市内における最大の研究拠点の一つであり、世界と伍した研究教育を推進していくにあたり、地元自治体である横浜市との連携・協力体制のもと、様々な形で地域・社会へ貢献をしていく。

地域社会への貢献を前提とした本学のさらなる発展のためには、国内外の優れた学生や研究者を集めていくことが重要であり、そのためには学生寮やゲストハウスといった機能の設置が必要不可欠である。それらの実現に向け、市街化区域への編入や地区計画等を視野に入れた検討を進めていく。

その他、地域・社会への貢献や周辺自治体との連携が可能な計画として、一例を以下に挙げる。

- ① 近隣住民も利用可能なすすかけ台駅と直結したトンネル整備
- ② ゲストハウスやレンタルラボなど、横浜市の国際戦略ともマッチした、新たな機能の設置
- ③ 国道 246 号線拡幅に伴う、道の駅機能等の付加
- ④ 特定緊急輸送道路 (国道 246 号線) に面する多目的グラウンドの緊急物資の投下先としての活用
- ⑤ すすかけ台駅～すすかけ門 (246 号線ガード下) に至る公道の安全性向上 (町田市との協力・連携)



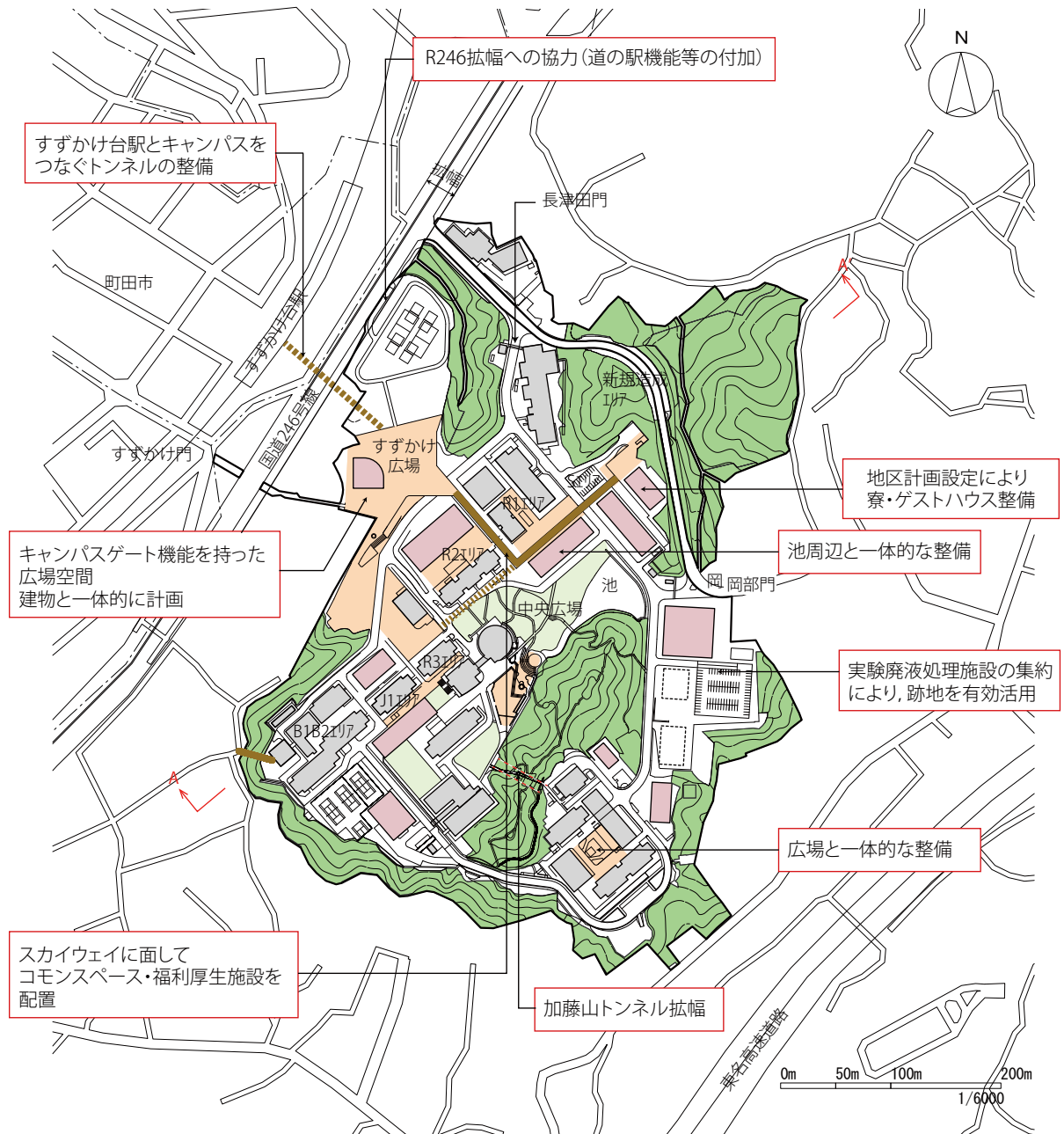


図 4-12 建物整備計画と外部空間の配置計画

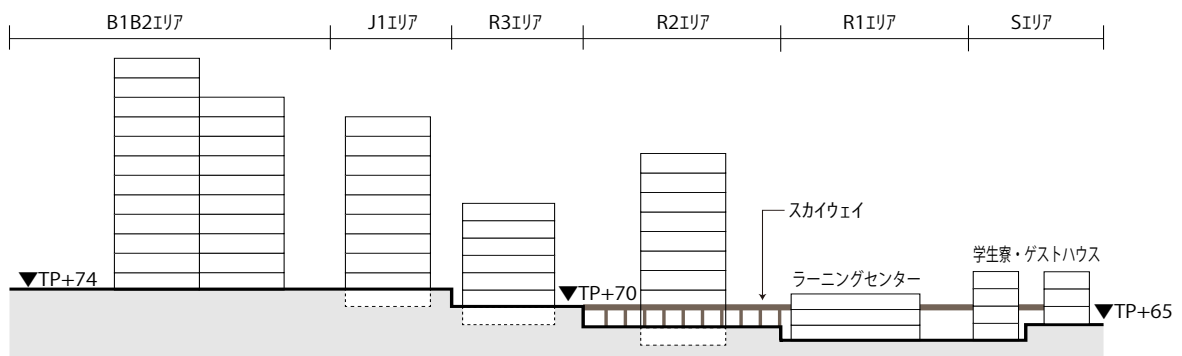


図 4-13 スカイウェイ構成イメージ (A-A')

## 4-6. インフラ・エネルギー計画

コンセプト：持続可能なインフラネットワーク

<インフラのルール>

すすかけ台キャンパスでは、キャンパス外周道路の完成を同時に、共同溝のループ化も完了している。今後は、建物整備やインフラの老朽更新に合わせて、共同溝内の配管配線の偏りを解消し、ライフラインの維持管理を適正に行っていく。また、老朽化している設備センターの改築整備や一部が不用工作物となっている廃水処理施設の集約整備を進めるとともに、施設の省エネルギー化や温室効果ガス排出抑制を更に推進していくため、太陽光発電設備の設置を進め、再生可能エネルギーを活用した分散型エネルギー供給システムの構築を目指していく。

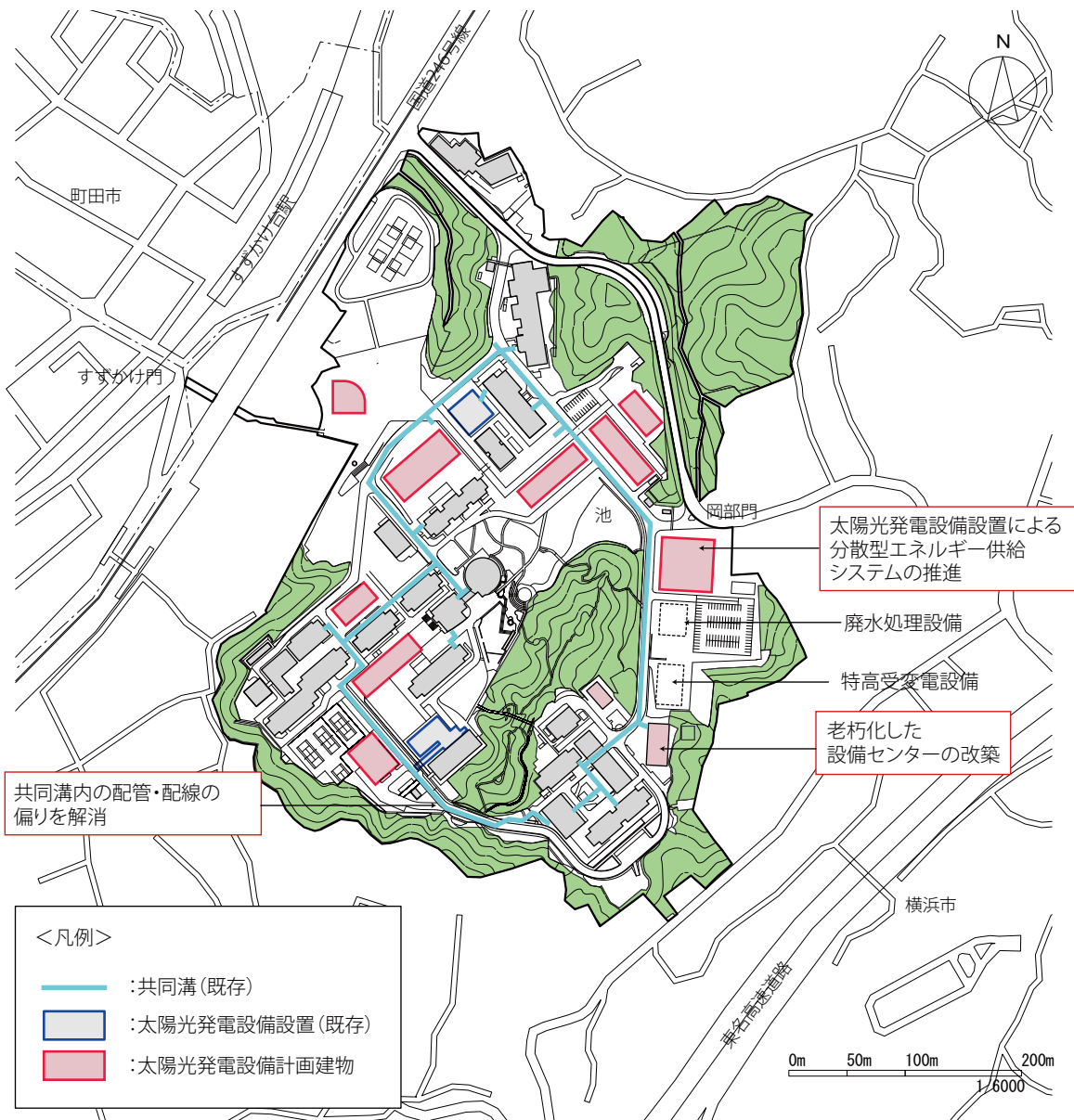


図 4-14 インフラ・エネルギー計画

## 5. 田町キャンパス再開発における基本方針

## 5-1. 再開発基本方針

### (1) 田町キャンパス周辺の開発状況

田町キャンパスを含む周辺地区は、田町駅東口地区再開発地区計画が策定されており、その内田町キャンパスエリアは、既存の教育機能を活かしながら教育、研究、交流機能を有する地区である「教育・研究地区」として位置づけられている。同地区計画の都市計画決定を受け、すでに隣地の再開発及びJR田町駅の東西連絡通路及び駅前広場の拡幅整備が完了し、供用されている。

また2020年東京オリンピックも視野に、国家戦略特別区域及び都市再生特別地区（都市再生緊急整備地域）にも指定されており、田町駅前広場を介した田町駅東口北地区においては、港区による公共街区と連結する形で大規模民間開発事業が急ピッチで進められている等、田町駅周辺の再開発整備が活発化しているところである。

### (2) 本学における田町キャンパス再開発の検討状況

本学においては、大岡山及びすずかけ台キャンパスの狭隘化、建て詰まりによって、田町キャンパスの持つ開発ポテンシャルを最大限活用していくことが3キャンパスの総合的な利用を促進していくための優先課題となっており、2016年の大学改革に向けた検討と並行して、大学改革推進本部のもと田町キャンパス再開発検討部会において検討が進められ、再開発後の田町キャンパスに配置する組織・機能の選定方針について、2015年8月に学内決定されている。

しかしながら、国立大学法人法の制約等もあり、現段階では具体的な将来計画を示すことができないため、CMP2016においては、田町キャンパスの再開発において目指すべき基本方針（案）を示すに留める。

この基本方針（案）は、今後の指定国立大学制度等の動向に注視しつつ、必要に応じて見直しをしていくものとする。

## 田町キャンパス再開発基本方針（案）

### (1) 再開発の規模設定

法定容積率である400%に地区計画見直しによる緩和容積として850%を最低ラインとして、特区制度等の活用により最大限の容積率確保を目指す。また、段階的な開発ではなく、敷地全体を一体的に開発することで、コストメリット及び事業収益性を最大限確保する計画とする。

### (2) 大学専有面積

再開発事業は、大学の財政負担リスクを可能な限り排除するため、PPP/PFI等の民間資金を活用したスキームとする必要があることから、大学が専有する床面積については、大学の負担が生じない範囲で最大限確保していく方針とする。

### (3) 組織・機能の選定方針

2015年に学内決定された「田町キャンパスに配置する組織・機能の選定方針」に則し、現在田町キャンパスに配置している附属科学技術高校の大岡山への移転も視野に入れ、本学の将来構想を実現するために必要な組織・機能を配置する。

**田町キャンパスに配置する組織・機能の選定方針** (2015年8月決定)

1. 3キャンパスの総合的利用方針における田町キャンパスの利用方針に合致するものであること。
2. 田町キャンパスに配置することが合理的であり、本学の機能強化につながるものであること。
3. 直接的又は間接的に収益が見込まれるものであること。

**(具体的な選定の考え方)**

- 3キャンパスの総合的利用方針に基づき、大学の機能強化につながる新たな組織・機能だけではなく、大岡山、すずかけ台からの既存組織・機能の移転についても積極的に推進する。  
なお、田町再開発後の3キャンパスの既存組織・機能の配置については、各部局からの要望や条件を加味し、ゼロベースで検討を進める。
- 田町キャンパスは、田町駅東口地区再開発地区計画において、教育・研究地区に位置づけられており、また国家戦略特区や都市再生特区にも指定されていることから、それらの上位計画における目標や基本方針等も踏まえて選定を行う。
- 研究機能については、研究改革の状況も考慮し、都市型高層キャンパスにあることがメリットとなりうる研究機能であることが望ましい。また、産学連携という観点から、インキュベーション施設や大学発ベンチャー等を積極的に取り込んでいく。
- 高層の融合施設となることから、特殊なスペース・設備が必要な研究機能<sup>\*</sup>は、原則として配置しない。  
※特殊なスペース・設備が必要な研究機能：
  - ・大容積スペース、高重量設備及び高電力使用設備等を必要とする実験研究
  - ・騒音、振動を伴う実験、局所排気設備や危険物を取り扱う実験研究等
- 再開発事業は、PFI等により民間収益施設を取り込んだ事業計画となるが、大学の事業費負担を軽減するため、大学が専有するスペースについても収益が見込まれる組織・機能を優先する。なお、収益の考え方<sup>\*</sup>については大学経営的な視点に立ち、幅広かつ多角的にとらえるものとする。  
※直接的な収益：スペース使用料、共同研究による外部資金、授業料収入等  
間接的な収益：情報発信等による大学ブランドイメージの向上、産学連携による研究シーズの開拓等



図 5-1 田町キャンパス現状

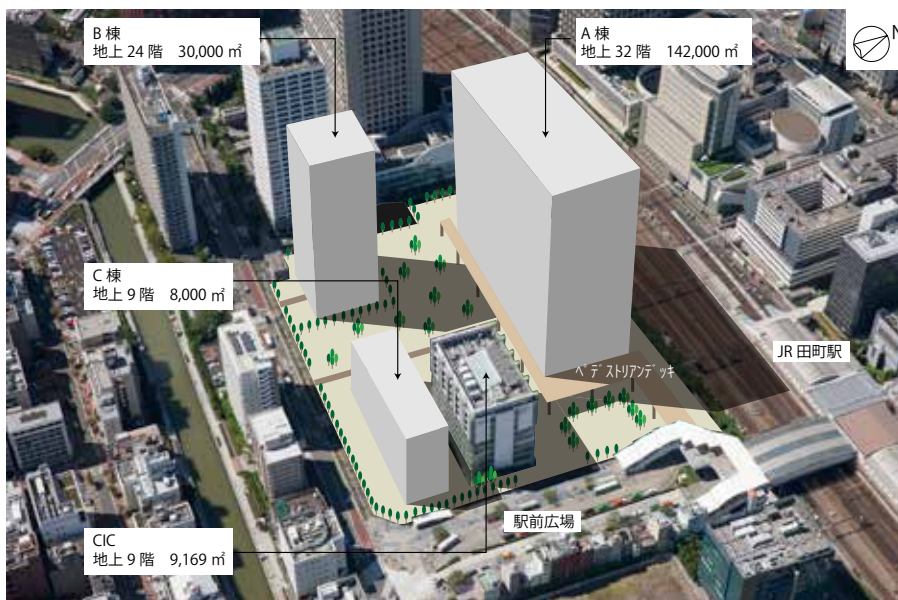


図 5-2 田町キャンパス再開発ボリュームイメージ

## 参考資料

1. キャンパス・マスタープラン 2016 策定検討組織 構成員
2. 検討会議等の開催状況
3. 将来計画・将来構想の変遷

## 1. キャンパス・マスタープラン 2016 策定検討組織 構成員

キャンパス整備計画室（2013.4～2016.3）

氏名	所属	任期	WG 検討班
岡田 清（室長）	理事・副学長（企画・人事担当）	2013.4～2016.3	
岡田 哲男	理工学研究科化学専攻 教授	2015.4～2016.3	キャンパス計画検討班
佐伯 元司	情報理工学研究科計算工学専攻 教授	2015.4～2016.3	キャンパス計画検討班
篠崎 和夫（WG 主査）	理工学研究科材料工学専攻 教授	2013.4～2016.3	施設マネジメント検討班
新野 秀憲	精密工学研究所 教授	2015.4～2016.3	施設マネジメント検討班
中井 検裕	社会理工学研究科社会工学専攻 教授	2013.4～2016.3	キャンパス計画検討班
中村 聡	生命理工学研究科生物プロセス専攻 教授	2015.4～2016.3	施設マネジメント検討班
西森 秀稔	理工学研究科物性物理学専攻 教授	2013.4～2016.3	施設マネジメント検討班
三原 久和	生命理工学研究科生物プロセス専攻 教授	2013.4～2015.3	キャンパス計画検討班
宮本 文人（WG 主査）	教育施設環境研究センター 教授	2013.4～2016.3	キャンパス計画検討班
室田 真男	社会理工学研究科人間行動システム専攻 教授	2015.4～2016.3	施設マネジメント検討班
屋井 鉄雄	総合理工学研究科人間環境システム専攻 教授	2013.4～2016.3	キャンパス計画検討班 施設マネジメント検討班
安田 幸一	理工学研究科建築学専攻 教授	2013.4～2016.3	キャンパス計画検討班
山田 明	理工学研究科電子物理工学専攻 教授	2015.4～2016.3	キャンパス計画検討班 施設マネジメント検討班
湯浅 英哉	生命理工学研究科分子生命科学専攻 教授	2015.4～2016.3	キャンパス計画検討班
臼井 秀明	施設運営部施設総合企画課 安全企画室長	2015.7～2016.3	施設マネジメント検討班
小山 薫	施設運営部長	2013.4～2016.3	キャンパス計画検討班 施設マネジメント検討班
本城 弘幸	施設運営部施設総合企画課 安全企画室長	2013.4～2015.6	施設マネジメント検討班
丸山 浩	財務部長	2013.4～2016.3	施設マネジメント検討班
吉野 明	研究推進部長	2015.4～2016.3	施設マネジメント検討班
上野 武（学外有識者）	千葉大学キャンパス整備企画室長，工学部教授	2013.6～2016.3	

※五十音順



## キャンパス計画・設備共用化部会（2016.6～2017.3）

氏名	所属	WG 検討班
芝田 政之（部会長）	理事・副学長（総務・財務担当）・事務局長	
大竹 尚登（副部会長）	副学長（研究推進担当）	設備共用化担当WG
岩澤 伸治	理学院 副学院長（研究等担当）	
井上 裕嗣	工学院 副学院長（財務・安全担当）	
久保内 昌敏	物質理工学院 副学院長（安全・財務担当）	
山村 雅幸	情報理工学院 副学院長（企画・人事等担当）	
中村 聡	生命理工学院 副学院長（総務担当）	
日野出 洋文	環境・社会理工学院 副学院長（財務・安全担当）	
猪原 健弘	リベラルアーツ研究教育院 副教育院長（財務担当）	
細田 秀樹	科学技術創成研究院 副研究院長（財務担当）	
小酒 英範	技術部長	設備共用化担当WG
西崎 真也	学術国際情報センター 教授	設備共用化担当WG
篠崎 和夫	物質理工学院 教授	
中井 検裕	環境・社会理工学院 教授	キャンパス計画担当WG
屋井 鉄雄	環境・社会理工学院 教授	キャンパス計画担当WG
安田 幸一	環境・社会理工学院 教授	キャンパス計画担当WG
丸山 浩	財務部長	
岡本 和久	研究推進部長	
前田 弘喜	施設運営部長	

## WG（キャンパス計画担当WG）（2016.6～2017.3）

氏名	所属
安田 幸一（WG 主査）	環境・社会理工学院 教授
奥山 信一	環境・社会理工学院 教授
中井 検裕	環境・社会理工学院 教授
宮本 文人	環境・社会理工学院 教育施設環境研究センター 教授
屋井 鉄雄	環境・社会理工学院 教授
齋尾 直子	環境・社会理工学院 教育施設環境研究センター 准教授
那須 聖	環境・社会理工学院 准教授
村田 涼	環境・社会理工学院 准教授
木村 吉宏	施設運営部 施設総合企画課長
鳩 勝	施設運営部 施設整備課長

## 2. 検討会議等の開催状況

### キャンパス整備計画室 会議開催状況・検討状況

2013年度 (平成25年度)	第1回会議 (2013年4月25日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャンパス整備計画室の任務, 班会議の設置について</li> <li>・キャンパス・マスタープランの見直しについて</li> </ul>
	第2回会議 (2013年12月24日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャンパス計画班会議における検討状況報告について</li> </ul>
2014年度 (平成26年度)	第1回会議 (2014年10月31日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大岡山・すずかけ台キャンパス建物配置(整備)計画検討の進め方について</li> </ul>
	第2回会議 (2014年12月17日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3キャンパスの総合的利用方針 承認</li> <li>・東京工業大学キャンパス・マスタープラン2016 構成 承認</li> <li>・大岡山キャンパスゾーニング計画 承認</li> <li>・大岡山キャンパス建物高さ設定について 承認</li> <li>・すずかけ台キャンパス今後の整備方針について 承認</li> </ul>
	2014年12月24日	<b>【学長へ提言】3キャンパスの総合的利用方針</b>
	第3回会議 (2015年2月3日)	(キャンパス・マスタープランにかかる審議事項なし)
	2015年2月20日	<b>【学内決定】3キャンパスの総合的利用方針</b>
	第4回会議 (2015年3月27日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大岡山キャンパス・旧図書館跡地の整備計画について 承認</li> <li>・すずかけ台キャンパスゾーニング計画について 承認</li> </ul>
2015年度 (平成27年度)	第1回会議 (2015年6月11日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年度までの検討状況とスケジュールの確認</li> </ul>
	第2回会議 (2015年11月25日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京工業大学キャンパス・マスタープラン2016(検討案)について</li> <li>・大岡山・すずかけ台キャンパスの建物整備年次計画等について</li> </ul>
	第3回会議 (2016年3月16日)	<b>東京工業大学キャンパス・マスタープラン2016(案) 承認</b>

WG（キャンパス計画検討班） 会議開催状況・検討状況

2013年度 (平成25年度)	第1回会議 (2013年5月20日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャンパス計画上の問題点について</li> <li>・各キャンパスの保有面積と法的要件について</li> </ul>
	第2回会議 (2013年6月13日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大岡山・すずかけ台キャンパスの建物経年状況と今後の推移について</li> <li>・大岡山・すずかけ台キャンパスの建物配置と主要動線について</li> </ul>
	第3回会議 (2013年8月2日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大岡山キャンパスのゾーニング計画について</li> <li>・大岡山キャンパスの将来規模設定について</li> <li>・部局別保有面積について</li> <li>・講義室、事務局施設の現状と課題について</li> </ul>
	第4回会議 (2013年10月2日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・WG検討状況報告書（案）について</li> <li>・大岡山キャンパスのゾーニング計画（用途別、建物高さ）について</li> <li>・大岡山北地区再開発手順の検討について</li> <li>・大岡山キャンパスにおける事務局施設、学生寮の建設場所の検討について</li> </ul>
2014年度 (平成26年度)	第1回会議 (2014年11月21日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3キャンパスの総合的利用方針について</li> <li>・キャンパス・マスタープランの構成について</li> <li>・大岡山キャンパスゾーニング計画について</li> <li>・大岡山キャンパスの建物高さ（階数）の設定について</li> <li>・大岡山キャンパス・旧図書館跡地の整備計画について</li> <li>・すずかけ台キャンパスにおける建物高さの制約条件について</li> </ul>
	第2回会議 (2014年12月8日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3キャンパスの総合的利用方針について</li> <li>・キャンパス・マスタープランの構成について</li> <li>・大岡山キャンパスゾーニング計画について</li> <li>・大岡山北地区、南地区のエリア設定・建物整備計画について</li> <li>・大岡山キャンパス・旧図書館跡地の整備計画について</li> </ul>
	第3回会議 (2015年1月30日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京工業大学キャンパス・マスタープラン2016（構成案）について</li> <li>・大岡山西地区、北地区、南地区、東地区、緑が丘地区、石川台地区のエリア設定・建物整備計画及び旧図書館跡地の整備計画について</li> <li>・大岡山キャンパス将来動線計画について</li> <li>・TSUBAME 将来移転可能性の検討について</li> <li>・すずかけ台キャンパスゾーニング計画及び改修移行計画方針について</li> </ul>
	第4回会議 (2015年2月27日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大岡山キャンパス建物整備年次計画について</li> <li>・大岡山キャンパス・旧図書館跡地の整備計画について</li> </ul>
2015年度 (平成27年度)	第1回会議 (2015年8月7日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京工業大学キャンパス・マスタープラン2016（案）（基本理念・基本方針）</li> <li>・大岡山・すずかけ台キャンパスの建物整備年次計画について</li> <li>・キャンパス諸問題の収集について</li> </ul>
	第2回会議 (2015年10月26日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京工業大学キャンパス・マスタープラン2016（案） （現状把握と将来規模設定、及び構成）</li> </ul>
	第3回会議 (2016年2月25日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京工業大学キャンパス・マスタープラン2016（案） （大岡山・すずかけ台キャンパス将来計画、田町キャンパス再開発基本方針）</li> </ul>

企画戦略本部会議 キャンパス計画・設備共用化部会 会議開催状況・検討状況

2016年度 (平成28年度)	第1回会議 (2016年7月28日)	・東京工業大学キャンパス・マスタープラン2016策定手順について ・キャンパス計各担当WGの設置
	第2回会議 (2015年9月15日)	(キャンパス・マスタープランに関する議題はなし)
	第3回会議 (2016年12月27日)	・東京工業大学キャンパス・マスタープラン2016(学内意見照会案) 承認
	企画戦略本部会議 (2017年1月20日)	・東京工業大学キャンパス・マスタープラン2016(学内意見照会案)
	2017年1月26日 ～2月6日	(学内意見照会)
	第4回会議 (2017年2月14日)	・東京工業大学キャンパス・マスタープラン2016(最終案) 承認
	企画戦略本部会議 (2017年2月16日)	・東京工業大学キャンパス・マスタープラン2016(最終案) 承認
	役員会等	2017年3月3日 役員会・教育研究評議会 承認
2017年3月8日 経営協議会 承認		
2017年3月17日 部局長等会議 報告		

WG(キャンパス計画担当WG) 会議開催状況・検討状況

2016年度 (平成28年度)	第1回会議 (2016年8月29日)	・キャンパス将来計画の全体構成について ・既存建物の目標耐用年数について ・キャンパス整備計画について
	第2回会議 (2016年12月12日)	・キャンパス中長期整備計画について
	第3回会議(メール審議) (2016年12月22日)	・キャンパス中長期整備計画(案) 承認

### 3. 将来計画・将来構想の変遷

1971年（昭和46年）	東京工業大学長津田地区の使用計画
1974年（昭和49年）	東京工業大学長津田地区の使用計画 増補（第3回）
<b>1979年（昭和54年）</b>	<b>すずかけ台キャンパス開設</b>
1979年（昭和54年）	東京工業大学長津田地区の建設と整備
1989年（平成元年）	東京工業大学の将来計画（東京工業大学将来計画に関する懇談会）
1993年（平成5年）	東京工業大学の将来構想（通称オレンジ本）
<b>2001年（平成13年）</b>	<b>大学院重点化完了</b>
2001年（平成13年）	東京工業大学の将来構想 （21世紀の個性輝く東京工業大学検討委員会・将来構想検討部会）
2002年（平成14年）	田町地区将来構想報告書 （21世紀の個性輝く東京工業大学検討委員会・将来構想検討部会・田町地区将来構想部会）
	田町地区キャンパスグランドデザインワーキンググループ報告 （21世紀の個性輝く東京工業大学検討委員会・将来構想検討部会・田町地区将来構想部会・田町地区キャンパスグランドデザインワーキンググループ）
2002年（平成14年）	東京工業大学の施設に関する点検・評価
2003年（平成15年）	東京工業大学の将来構想（通称ウグイス本）
<b>2004年（平成16年）</b>	<b>国立大学法人化</b>
2005年（平成17年）	東京工業大学「すずかけ台キャンパス」マスタープラン（案）（すずかけ台地区5部局長等懇談会）
2006年（平成18年）	東京工業大学キャンパス構想21将来計画（企画室施設整備専門班） 大岡山「時-空を緑でつなぐ大岡山キャンパス」将来計画 すずかけ「ペリパトスの研杜21」将来計画
	「東京工業大学田町駅前インテリジェントキャンパス」将来計画（案）
2009年（平成21年）	東京工業大学の将来構想「東工大ビジョン2009」
2011年（平成23年）	東京工業大学キャンパス構想21将来計画事後評価報告書（企画室施設整備専門班）
2014年（平成26年）	3キャンパスの総合的利用方針（役員会決定）
<b>2016年（平成28年）</b>	<b>大学改革</b>



## 東京工業大学キャンパス・マスタープラン 2016

発行	2017年3月(初版)
策定	国立大学法人東京工業大学 企画戦略本部 キャンパス計画・設備共用化部会
企画・編集	施設運営部 施設総合企画課 (構成担当) 樋口 豊, 藤原寛子
作成協力	すずかけ台環境整備WG
問い合わせ先	施設運営部 施設総合企画課 企画・計画グループ E-mail sog.kik.kei@jim.titech.ac.jp <a href="http://www.sisetu.titech.ac.jp/cmp2016/cmp2016.htm">http://www.sisetu.titech.ac.jp/cmp2016/cmp2016.htm</a>